魔法少女リリカルなのは　死神の花

楚良

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　死神の花

【Ｎコード】
Ｎ８０３１Ｒ

【作者名】
楚良

【あらすじ】
ＪＳ事件から４年後のｖｉｖｉｄの時代からさらに２年。
また新たな戦いが始まる！！
ついに動き出したスカリエッティ達。
その協力者たちは一度死んだ人間たち。
桜はあいつらを知っている！
そしてついにあいつが帰ってくる！
※これは『鮮烈で桜色の物語』の続編ではなく『桜の花が咲くころに』の続編なのでお間違いなく。

前作の『桜の花が咲くころに』を見てからこれを見ていただけると嬉しいです。現在、連載中止中

プロローグ

あの世。
人間の言葉で言うなら天国か地獄。

その天国にいる神。
人々は名前を知らないが、天使たちは彼女を『女神アテナ』と呼んでいた。

「なにこれ！？また脱獄！？」

彼女は日々悩んでいた。
毎回のごとく死者の脱獄。

死者はあの世で人間の数千倍、もしくは数万倍の人生を働き続ける。
そして働き終わった者には初めて新しい命と体を貰えるのだ。

だがこんな元が人の魂が数千、数万の年月を働ける訳もなく。
何億と言う魂たちが脱獄した。

その魂たちはこの世。
つまり現世に来ると、誰かに憑依したり、何か騒動を起こしたりする。
力ある者は自分の体を元にし新しい体を作ることも出来る輩もいた。

だがそれはほんの一部の者だけ。
その力はたいてい争いを好まないものが持っていたり、正直に働いて体と命を貰おうと考える者たちが多かった。

「もうめんどくさいわね。いちいち誰かが行って連れ戻すの。どうせだから死神でも作ろうかしら」

「それなら妾の相棒ではどうだ？少し寿命をいじってやればすぐにこっちに来れるぞ」

「確かあなたの相棒って・・・」

「そうだ。あの翼の英雄だ」

「怖いわね。自分の相棒を売るなんて」

「よかろう？いささかお前の相手は飽きたのでな」

「ふっ。いいわ、あの子を死神にしようじゃない。それに今回脱獄したのあの子にゆかりのあるヤツらだし、それにちょっと厄介だからね」

アテナの持つ脱獄者リストには数字と写真が貼られていた。
０９、１１、１５、２０、１００、５５５。
その６人は自分の体を作れる力を持っていた。

第０１話　機動六課復興

新暦７８年５月ごろ。
桜の花が咲く季節が少し過ぎた頃だった。

ここは聖王教会。
その一室に３人の人物がテーブルに座ってお茶を飲んでいた。
男性が１人と女性が２人。

『騎士カリム。お客様が到着されました』

通信画面が現れ、青い髪の女性が映った。
彼女はセイン。
元ナンバーズの１人で修道騎士だ。

「ありがとうセイン。案内お願いしますね」

『はい。わかりました』

返事をした女性はカリム・グラシア。
ここ、聖王教会での重役であり、聖王教会騎士団の騎士でもあり管理局にも名目上籍を持っている人物である。

「どうやら着いたようですね」

「そうだな」

男の方はクロノ・ハラオウン。
次元航行艦『クラウディア』の艦長であり、時空管理局本局の提督

である。

そしてもう一人の女性はシャッハ・ヌエラ。
彼女も聖王教会に所属するシスターで、カリムの補佐もしている人物である。

話していると扉をノックする音が聞こえた。

「はい」

シャッハはそれに返事をしながら立ち上がり、扉を開ける。
そこにはセインと女性と青年が立っていた。

「お客様をお連れしました」

「ご苦労様ですセイン。さ、どうぞ」

「失礼します。八神　はやて二佐、連絡を受けてこちらに参りました」

「同じく高町　桜（ハル）一等空尉です」

そう言って2人は敬礼をしながら答えた。
客はどうやらはやてと桜のようだ。

「ご苦労様。それと、知ってる人だけだったらそんな堅い挨拶はやらなくていいって言ってるのに」

「ごめんな～。久しぶりやったからつい癖で」

「それと桜君、結婚おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

桜はフェイトとつい１ヶ月ほど前に結婚していた。
桜が１８になってからプロポーズしてすぐさま結婚。
ある意味で電撃結婚だ。

一方はやては運命の人とは出合えずに、機動六課解散後の今もフリーの捜査官をしていた。

「なんやろう。今ものすごく作者に殺意がわいたんやけど」

「気のせいじゃないですか。よくある事ですよ」

よくあるかわからないがやめてください。ｂｙ駄作者

「２人とも元気そうで何よりだ。はやては未だに進展なしか？」

「クロノ君、ウチとあとでＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩでもしよか」

「え、あ、えっと、す、すまん・・・」

「わかればええねん」

はやての何かに触ったクロノの発言。
すぐさま謝ったがこれでいいのかどうか・・・。

「そういえば今日呼んだ件はなんやろ？緊急と言う事やからめっちゃ急いできたんやけど」

「俺も急いで教導終わらせてきましたよ。一体何があったんですか？」

「とりあえず本題に入りましょう。シャッハ」

「はい」

カリムはシャッハに声をかけると、シャッハは部屋を暗くして扉に鍵をかける。
クロノとカリムの顔はいつもの柔らかい表情から真剣な顔つきに変わった。

「結構大きな話みたいやね」

「あぁ、まだ上層部のほとんども知らないことだからな」

「2人とも、まずはこれを見てほしいの」

暗い中、画面が現れ映像が映る。
その映像には数台のトラックが燃えている映像だった。

「！？・・・これは？」

桜は驚きながらもカリムに尋ねる。

「先日の深夜、こちらで保管、調査が終わったロストロギアを積んだトラックが何者かに襲われたの」

「これは本局へ輸送するために秘密裏に行っていたのだが、御覧の

通りさ」

「ということは次元港に？」

「ええ。そこから次元航行艦に移して運ぶつもりで、中には危険な物もあったから秘密裏にしていたの。もちろん護送ということだから二小隊の魔導師を同行させたわ。だけど・・・」

「見事にやられた、というわけやな・・・」

「ええ・・・」

「事が事だからＡＡランク４人、Ａランク４人を選んで編成させたが」

「見事にやられた、と言う事ですか」

ＡＡランク４人、Ａランク４人を一晩で壊滅させた。
それはつまり相手は相当の実力者だと言う事を確定させるためには十分だった。

「これが運んでいたロストロギアのリストだ」

クロノから手渡せられたリストを２人は見てみた。

「意外に魔導書が多いな」

「ああ。で、なくなったのがこれだ」

リストの一部の覧が透明になった。

それらは奪われていないロストロギアで、残ったものが奪われたものだ。

「これって！？」

「気がついたようだな」

「ジュエルシードとレリック。忘れたくても忘れられへん」

「！？この魔導書って！」

桜は気付いた。
奪われた魔導書は全て自分が知っているものだと。

「知っているのか？これらは危険性が無かったから送ったんだが」

「危険性がない？そんなバカな！これは全部、鬼械神（デウス・マキナ）を呼べる危険な魔導書だ！！しかも、破壊したはずの『ナコト写本』まであるなんて馬鹿げてる！！」

そう、桜は以前アルハザードにいたころアルに聞いたことがあった。
『ナコト写本』『セラエノ断章』『水神クタァト』『ドール讃歌』
『エイボンの書』『ルルイエ異本』
その6冊に加えて『死霊秘法』を入れた7冊は危険な魔導書であり、鬼械神を呼べる魔導書だとアルに聞いたことがあった。
他にも鬼械神を呼べる魔導書はあるが以上の7冊を超える者はないとされていた。

しかも『ナコト写本』に至っては6年前。
リベルレギスと邪神ごと一緒に破壊したはずだ。

なのに何故ここに『ナコト写本』の名があるかがわからない。
「ま、待て。鬼械神（デウス・マキナ）とはなんだ？」
「鬼械神は6年前、ミッドで戦っていたあの巨大ロボットの事ですよ。ちなみにあの片方は俺がのっていたました」
「まさか、あんなのが6体も現れるのか？」
「相手が魔導書に認められれば、必ず最終手段として使ってきます」
「そうか。うかつだったな。だが、君もそれを出せるのだろう？」
「残念ながらアルがいない今は出せません。ページには乗っているんですが」
デモンベイン・ジャスティスはアルがいなければ出せない。
最後に消えた時から魔導書のページとなって眠っている。
「それともうひとつ。つい先日新しい予言が出たわ」
「「！？」」
「でもまだ全部解読しきれてないの」
「だが解読できた部分はあると」
「ええ」
「なら解読できた部分だけでも」

「わかってる。では、いきます」

目を瞑り静かに予言を読み始めた。

大地の法の塔がある世界にて　死者と科学者たちは　災いを起こす
その災いは死者が民前に現れし時　始まりを告げ　世界を混乱へと
導くだろう
そして戦いの中　英雄が死す時　1人の死神がこの地に舞い降り
全てを覆すであろう

「死者と科学者？」

「科学者だったらスカリエッティ達だと思いますが死者は・・・」

はやてと桜は今言われた予言について考えていた。
2年ほど前、スカイエッティはナンバーズを連れて脱獄をしている。
『科学者』の単語はスカリエッティの事を指しているだろう。
だが『死者』の単語が当てはまるやつらは見覚えがない。

「それに『英雄』って・・・」

「まさか・・・俺ですか？」

『英雄』その単語に当てはまる人間は少ない。
現在有名な英雄は『翼の英雄』と名高い桜だ。

「世界を混乱へって事はまたこの世界が危ないって事ですよね」

「ダメや！絶対止めなあかん！それに桜も死なせわせえへん！！」

「俺だって早死にしたくありません。絶対止めて見せます！！」

「そこでなんだけどはやてに頼みがあるんだ」

「ウチに？」

「これは僕やカリム、そしてミゼット総議長からのお願いだ」

クロノとカリム。
そしてあの伝説の三提督と呼ばれる中の一人のミゼット・クローベルからのお願いであった。

「君にもう一度機動六課を立ちあげてほしいんだ」

「えぇ！？」

「はやてが過去のことで思っていることはあるとは思うわ。だけど、ここでちゃんとまた動いておかないと、もう一度・・・あのようなことになってしまうかもしれないわ」

「でも・・・」

「だから、もう一度あの部隊を立ち上げてほしいの。過去の功績か

ら今度は正式に部隊を動かせることができるわ」

「それに、メンバーは前の者を招集しよう。追加のメンバーもこちらで手配する。だから、おまえには思う存分に力を振るってもらいたい」

「だからお願い。もう一度、部隊長として機動六課を動かしてもらえる？」

「俺からも頼みます。大切な人を守るためにも」

「・・・。はぁ、そこまで言われたら断れへんな」

「なら・・・引き受けてくれるのね？」

「はい！」

立ちあがりカリムとクロノに向かって敬礼し言った。

「八神はやて二佐！機動六課の部隊長の件、若輩者ですが、お引き受けします！！」

それに返事をするかのようにカリムもこう言った。

「では・・・古代遺物管理部機動六課を再結成し・・・正式に運用することをここに宣言します！」

「そういえば俺が呼ばれた理由って？」

「あ、忘れてた。これを見てほしいんだ。僕達が知ってそうな人に聞いたが知らないと言われてね。君だったら知ってるんじゃないかって」

そう言ってクロノは今度は違うリストを手渡した。
そのリストには６人の写真が貼ってある。

「一応確認出来た襲撃犯だ。知ってるかい？」

「・・・・・・」

「桜？」

「な・・・で・・・」

「どうした？」

「なんで！なんで０９（ナイン）達が生きているんだ！！！」

そこに乗っていたのはかつて殺したヤツらだった。

第０１話　機動六課復興（後書き）

どうも楚良です。

この小説はなんとなく頭に浮かんだから描き始めたものです。

アイディアが尽きれば更新が出来なくなります。

逆にアイディアがあれば普通に更新します。

でもきまぐれ更新なのでいつ更新できるかわかりません。

それでも応援してくれると嬉しです。

キャラ紹介

名前：高町　桜（ハル）

年齢：１８歳

性別：男

身長：だいたい１７０ちょい

体重：６０ぐらい

容姿：子供のころよりも少し大人っぽくなって、髪が伸びている。
　アルとの契約が切れているため黒髪である。

性格：誰にでも優しい

資格：教導資格、バイク免許、スター式特許権、調理師免許、他

デバイス：ＺＥＲＯ（ゼロ）

備考：宝石の埋め込まれたプレートに
　翼のエンブレムが描かれている。
　ＷとＳＴの２体分の容量があるためモードが豊富。
　ソード、ツインソード、サイズ、ヴァリス、
　ハイパーヴァリス、バスターライフル、
　ツインバスターライフルのモードがある。
　エクシード、フルドライブももちろんのこと
　翼もしっかりついている。
　基本形態はヴァリスから。

ツインソードは連結させて長剣にも可能。
2体のメモリーを共有しているため性格などはそのまんま。
容量ギリギリまで入っているため
メンテがとても大変（桜談）

死霊秘方＝アル・アジフ
備考：最初の方に唯一壊されていない
ロイガーとツァールの召喚のための
ページが乗ってあるが今は召喚出来ない。

術式：スター式ミッド混合（正式に特許を取ってある）

魔力光：白銀

眼の色：エメラルドグリーン

髪の毛：黒

趣味、特技：料理（腕が上がっている）、
機械いじり（その気になればデバイスも作製可能なほど）、
読書、ストライクアーツ、ストライクアーツスター式、
双剣術（高町流士郎さん直伝、桜流）、他

好きな人：フェイト（恋人）、ノーヴェ（結構仲がいい）
なのは（母親）、ユーノ（父親）
スバル（一緒にいると飽きない）
エリオ（親友）、アギト（大親友）、他

備考：機動六課解散後教導隊へ移行。
空戦、陸戦共に教えている。

１８になったころにフェイトにプロポーズ。
返事を貰い即結婚。
結婚するときにクロノに反対されたそうだ。
リンディは「喜んで」と言っており、クロノも折れた。
新機動六課ではウイングス分隊隊長。
なのは、ヴィータと共に教導もする事になる。
管理局では『翼の英雄』
『二代目エース・オブ・エース』
『鬼械神』『炎髪妁眼の討ち手』
などの通りなで通っている。

・他

名前：フェイト・Ｔ（テスタロッサ）・高町

性別：女

年齢：２５歳

備考：１８になった桜にプロポーズを受けた。
その後に結婚、新婚生活を送っている。
桜と結婚したため性が「ハラオウン」から
「高町」と変わってしまっている。
現在も執務官として頑張っている。

名前：なのは・スクライア

性別：女

年齢：２５歳

備考：機動六課解散後ユーノと付き合い始める。
４年の歳月を経てついに結婚。
娘のヴィヴィオと共に性を「スクライア」へと
変えて３人仲良く暮らしている。
現在も教導官として日夜励んでいる。

第０２話　家族

聖王教会で予言を聞いた日から数日。
俺は考えていた。

俺が８年前に生き残るために殺したヤツら。
成長をしていても面影を残しているからすぐにわかった。
Ｎｏ０９ナイン、Ｎｏ１１イレヴン、
Ｎｏ１５フィフティーン、Ｎｏ２０トゥエンティー、
Ｎｏ１００ハンドレット、Ｎｏ５５５ファイズ。
一番俺が苦戦した相手だった。
しかもこの６人はグルで俺に向かってくることもあった。
でも、何が何でも生き残ってやると言う思いと意地が上回り、俺はこいつらを完璧に、動けなくなるまで、誰が見ても「むごい」と言うぐらいまで殺した。

だが何で今更こいつらが。
しかも殺したのに。
生きているはずがない。
脳天にナイフ１０本ぐらい突き刺したのに。

何度考えても答えは同じだ。
あいつらが生きているんだったらもう一度殺すまで。
今度は生きかえろうとしても出来ないほどまでな。

それと昨日はやてさんから連絡があった。
前機動六課メンバーへの声掛けは終わったと。
仕事が早くて何よりだ。

今は教導隊からの帰り道。
近くの店で食材を買ってからの帰宅だ。
「ただいま～っておや？お客か？」
「桜、お帰り！さ、早く早く！」
「あ、ちょ、フェイト、そんな引っ張るなよ」
リビングに引っ張られながら入る。
そこには意外な人がいた。
「エリオ！キャロ！」
「1ヶ月ぶりだね」
リビングには親友のエリオ・モンディアル。
そしてその相棒のキャロ・ル・ルシエがいた。
「どうしたんだよ急に」
「実は六課の隊舎とかいろいろ終わるまでこっちに居る事になったんだ」
「急でごめんね」
「いいや。住人は多い方がいい。だろ？」
「うん！」

「よし！じゃ、今日は腕によりをかけて作るか。リクエストあるか？」

「特にはないけど」

「とりあえず量が必要だな。冷蔵庫の中身だけでたりっかな～」

～1時間後～

「フェイト、これ運んで」

「うん」

今夜の夕食のメニューの数がすごい事になっていた。
実に十種類以上。
エリオがたくさん食べると言う事なんで、ありあわせが多いがそれでもいい。

「それでは」

「「「「いただきます」」」」

「って食うの早！！」

気がつけばエリオはすでに一皿目を食べ終えていた。
こいつ、腕をあげたな？

「いや、美味しいからつい」

「ま、いいか。エリオらしいし」

「え？そうかな？」

「そうだよ」

「なんだか兄弟みたい」

くすくすと笑いながらそう言ったフェイト。
確かにはたから見れば兄弟だ。

「やっぱり食事は多い方がいいね」

「ああ。いつも2人で食べるにも楽しいけど、やっぱみんなで食べた方がもっと楽しい」

「あ、お代わりいい？」

「早！ま、いいけど」

食べ終わった後、フェイトとキャロはお風呂に入り、桜とエリオはかたずけをしていた。

「またみんなと一緒の職場だね」

「ああ。今度は俺も分隊の隊長として入る。メンバーが楽しみだ」

「え、そうなの！？」

「聞いてなかったのか？だから俺はＦＷのメンバーから外れるぞ」

「いや、新メンバーを加えるってのは聞いてたんだけどそこまでは」

「そうか。ま、お互い同じ職場だ。頑張ろうぜ」

この後2人がお風呂から上がったのを確認しエリオを先に入らせた。
フェイトとキャロは楽しく談笑中だ。

（ナイン、お前だけは絶対に・・・。待ってろよファースト。今度こそ仇を取ってやるからな）

俺は1人決意を胸にしていた。
絶対にナインだけは殺す。
たとえ相討ちになったとしても、刺し違えてでも必ず。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「で、計画はどうなってる。全員の様子はどうした」

「今の所全員腕試しって感じね。ま、一部のエースさえ落とせばあとはこっちのもんよ」

「ネロ、そう言うお前はどうなんだ？」

「私はもうバッチシ。いつでも行けるわ。あなたと同じでね」

「ふっ。いち早く『ドール讃歌』に認められたから天狗にでもなっているのか？」

「まさか。こんな状況で天狗になんてなってたらいつ来るかわからない”天使”どもに簡単に捕まっちゃうじゃない。ま、私達の鬼械神が全員でかかれば簡単に倒せるけどね」

「まぁ、いい。とりあえず今は計画に集中しろよ。その過程であの浮ついた英雄を殺してやるんだ。あの忌々しい４．４．（フォーツー）をな」

「Ｎｏ４４。確か『翼の英雄』なんて呼ばれてるわよね、あいつ」

「ああ。だから今度は俺らが殺してやるんだ。死ぬことの恐怖などを教えてやろうじゃねえか」

「ええ。私達『アンチクロス』が。フォーツーと管理局に地獄を見せるために」

ｓｉｄｅｏｕｔ

風呂から上がった後。
リビングに戻るとフェイトが１人窓の外を見ていた。
エリオとキャロはすでに寝ているのだろう。

「フェイト？」

「あ、桜」

「まだ、２人の事心配してんの？」

「え！？」

言われた途端に驚く。
図星のようだ。

「やっぱりか」

「・・・わかっちゃうよね」

「まぁな」

フェイトの横に立って同じように外を眺める。
今夜もいい空だ。

「六課に来て2人は確かに強くなったよ。今までも私の元から離れて2人は頑張ってきた。本当に嬉しかった。けど・・・それでもやっぱり不安なんだ・・・。あの2人が、家族が危険な目にあうんじゃないかって。私の力では助けられないかもしれない。今度の事件は前よりも大きな事件になるんじゃないかって。不安なんだ」

横に居るから初めてわかる。
体が少し震えている。
こっちから見てても不安だって言うのが良く判った。

「でも2人はまた自分で決めてここに来た。はやての話を聞いて、私や保護隊の人とも話して、二人は決めたんだ。だから応援したいし、二人の意志を尊重したい・・・。けど、私はやっぱり――」

続けようとした言葉を遮るように俺はフェイトを抱きしめた。
優しく、安心できるようにと。

「え！？ハ、桜！？」

「大丈夫。２人は強いから。それに今度は俺だって教導に加わってたくさんの事を教えてあげられる。それに任務の時はたぶんフェイトが近くに居るさ。それでも心配なのはわかる。フェイトは過保護だし、心配性だからしょうがない事だ。でもさ、信じてあげようよ。２人の事、２人の力をさ」

「桜・・・」

背中をぽんぽんと叩きながらなだめるように話す。
体の震えはいつしかおさまっていていつも通りになっていた。

「それにさ、１人で悩まないでよ。近くには俺がいるんだしさ。誰かに頼っていいんだよ。フェイトは１人じゃないんだからさ」

「うん・・・。うん・・・」

「フェイトが無理な時は俺がいる。それに母さんたちだっている。相談すればみんな絶対に協力してくれるからさ。な」

「うん。ありがとう、桜」

そう言って先に部屋に行って眠りについたフェイトだった。

第０２話　家族（後書き）

どうも楚良です！

明日学校に行って離任式に出て来たいと思います！

めんどいですね。こんなことしなくていいからさっさと行けって感じなのは俺だけでしょうか。

ま、なんにせよいかなきゃいけないんですけどね。

それと明日は俺の通学用自転車をいとこの家に取りに行ってきます。

そしてなんと３０日には仙台育英高校が始まります！

ついに俺の高校生活が！！

もしかしたら授業中に更新出来たりして！！（笑）

先輩のクラスがカオスだからそんな印象しかないｗ

とりあえず明日も頑張って行きたいと思います。

第０３話　始動！

「で、あいつはどうした？」

「どしたの？」

「トゥエルブは、ガイストはどうした！」

「さぁ、今頃焦って自分の魔導書探してんじゃないの？あいつだけ無いからね」

「唯一あの中に無かった『死霊秘法』か。あのバカが、先に動きやがって」

「ちょうどいいころ合いなんじゃないの？全員準備完了って言ってるし。鬼械神だって乗りこなしてるわよ」

「何？そうか、だったらやってやろうじゃないか。どっかロストロギアの保管場所でも探してぶっ壊せば出てくるだろう。あれは一番危険だからな。だろ、エセルトレーダ」

「いえ、『死霊秘法』は彼が持っています。ですのでまだ動くには早いかと」

「まさかあいつが！？だったらガイストを連れ戻せ！ネロ、準備をしろ。宣戦布告だ。スカリエッティどもにも伝えろよ」

「了解。我らが『アンチクロス』のリーダー”テリオン”様♪」

ｓｉｄｅｏｕｔ

五月が終わり六月がやってきた。
現在は新機動六課設立の準備中。
明日からは正式に動けるようになってある。

「にしてもやっぱ新築みたいに見えますね」

「そうだね。でもあんまり変わってないから懐かしいよ」

高町家（新婚）の２人とエリオ、キャロは荷物整理他をしに六課へやってきていたのだ。

「今回は寮が増えましたね。俺には関係ないけど」

そう、分隊の隊長として入る桜には寮などは関係なかった。
なにせ自室を持てるのだから。

「桜と同じ部屋が良かったな・・・」

「流石に職場ではその・・・自粛してほしいかな」

「相変わらずだね」

「母さん。ヴィヴィオ達も来てたのか」

話しかけてきたのは桜のオリジナル。
息子として養子に引き取ってくれたなのはだった。

現在はユーノと結婚しており「スクライア」の性を名乗っている。
一方ヴィヴィオ達ちびっこ。
ヴィヴィオ、リオ、コロナは１２歳になっており、ちびっこではないがアインハルトを加えた４人組。
今回の新機動六課の協力者として手伝ってくれる事になっている。
そして戦闘時は二代目ＦＷとして戦ってくれる仲良し４人組だ。

「あれ？父さんは？」

なのはと結婚したユーノ。
それはすなわち桜の父親になると言う事。
なので桜はユーノの事を「父さん」と呼ぶようになった。
ちなみにユーノも協力者の１人だ。

「ユーノ君は今日は無理だって。明日は来れるって言ってたけど」

「そっか。無限書庫の司書長だもんな。忙しいのはお互い様か」

ここで桜となのは達は別れた。
なんでも寮の中を見に行くそうだ。

「スバルさん！ティアナさん！」

「あ、桜！」

「元気してた？」

「はい。お二人とも元気そうでなによりです」

途中であったのは初代ＦＷメンバーのスバルとティアナ。
２人とも２０歳をこえて大人の女性へと成長を遂げていた。
ティアナは立派な執務官へなり、スバルは防災士長として頑張っていたのだが声をかけて戻ってきたのだ。
「自分の分隊もつって、やっぱ桜はすごいね！！」
「いえ、そんな」
「いいのよ。自信持ってやりなさい」
「はい。それと教導は俺も教える側に入るので覚悟して下さいよ」
「ど～んときなさい！」
「期待はしてるわよ」
２人と別れた後に自室へ直行した桜。
そして荷解きを終えてから今日来ているメンバー全員に会って一日が終わった。
～翌日～
「この機動六課の部隊長の八神　はやてです。以前試験運用の時に人はお久しぶり。今回初めて来た方は初めましてやな。よろしくお願いします」
朝、早速部隊長の言葉。
ぱちぱちと周りから拍手が送られる。

「ありがとうな。さて、長々と話すのは嫌ややろうからパパっと進めるな。まず、この部隊は試験運用と違って今度は正式に機動六課として今日から動き出します。主に扱う事件は古代遺物、主にロストロギアが絡んだ事件なると思います。他にも、本局や他の部隊からの任務等もあると思いますが、そこは協力して事に当たってください。今のところ大きく動くことになるのは、みんな知ってると思うけど、今世間でも多くの人が知ってる機械集団による謎の襲撃事件と身元不明の魔導師集団による襲撃事件の二つを調査していくことになると思うからみんな頭にいれといてな」

そう、最近では機械集団、魔導師集団の襲撃事件が相次いでいる。
機械集団とはガジェットの事だ。
おおかたスカリエッティのもので間違いなしとみている。
で、魔導師集団はたぶんナインたちだ。
こっちは数が少ないが規模が大きい。
どちらにせよその二つはがメインで動く事になるだろう。

「他にもこのミッドチルダでの事件も扱うし、出張とかもあるしな。みんで協力し合って取り組んで行くようにお願いします！」

『はい！』

「いい返事や。当分は資料整理や機械集団の事件の情報収集、他にもみんなが前にいた場所の仕事の続きとかになると思うから頑張ってな。さて、今から私たちの部隊で前線に出ることになると思う隊長陣の紹介をしてもらうな。では。お願いします」

はやてが言い終わると前回のスターズとライトニングの隊長、副隊長が前に出た。

俺も新しい隊長の1人なので前にでる。
「スターズ分隊、隊長なのは・スクライアです」
「同じく副隊長のヴィータだ」
「ライトニング分隊、隊長フェイト・T・高町です」
「副隊長のシグナムだ」
「ウイングス分隊、隊長兼、副隊長高町　桜だ」
全員が言い終わると敬礼。
またも拍手が飛び交った。
「他の部署から新たに前線部隊に入った子らもここでその紹介をさせてもらうな」
「機動六課へと配属になりましたギンガ・ナカジマ陸曹です！」
「同じくチンク・ナカジマだ」
「同じくノーヴェ・ナカジマ」
「同じくディエチ・ナカジマです」
「同じくウェンディ・ナカジマッス！よろしくッス！」
これまたずいぶん人数が増えましたね。
こりゃ騒がしくなるぞ。

「ギンガ達は桜の分隊でええか？」

「はい、わかりました」

というかもともとそのつもりじゃないのかな？
メンバーを知らされてないんだから。

「それじゃ、他にも細かいことはメールや各部署の隊長や上司の人に聞いてな。ほな・・・解散！！」

第０４話　宣戦布告

「さて、今回は自分と違う分隊の人とペアを組んでもらう。とりあえず手っ取り早くでいいから２人組作って」

現在は朝の訓練中。
今日は桜が中心で教導を進める事になっていた。
なのは、ヴィータはその手伝い。
ちなみに六課設立から約２週間が経っている。

「組んだ？」

『はい！』

「えっと今回余ったのはティアナさんですか。じゃ、ティアナさんは俺とで」

桜が担当するのはコンビネーションと多対一。
コンビネーションは分隊ごとバラバラになってしまっても、いつでも全力で戦うようにするため。
多対一はもしものためだ。

「じゃ、まずは俺とティアナさんで見本を見せる。後方援護が出来るヤツと組んだヤツは最低でも形は覚えてやってもらうからな」

『はい！』

「相手はガジェット。？型１０？型８？型２の合計２０体を相手に

してもらう。簡単そうに見えるが性能とかが半端ないから油断しないように。それじゃ、行きますよ」

「了解」

開始の合図とともに桜が突撃。
ティアナは後方援護へ回る。

「まずは状況を見てすぐさま判断。そしてすぐさま行動へ移すこと」

攻撃をかわしながら次々とガジェットを破壊して行く桜。
？型が後ろからアームを伸ばし襲いかかろうとしていた。

だが攻撃は届かない。
いや、止められたのだ。

後方援護のティアナがアームを攻撃。
注意を逸らして桜を助けたのだ。

「そして肝心なのが相方を必ず信じる事。仲間をよく知り、信じる事がコンビネーションの秘訣だ」

残りのガジェットを素早く破壊して見本は終了。
全員の所まで戻ったのであった。

「じゃ、どんどんやって行こうか。最初はエリオとノーヴェから」

ｓｉｄｅｏｕｔ

なんやかんやで朝の訓練は終了した。
全員くたくたで見るからに疲れている。

その中でも特にティアナ、エリオ、キャロ、他多数メンバーがやばかったらしい。
救助隊に居て毎日の訓練を欠かさなかったスバルやノーヴェ、教導隊で毎日教えているなのはと桜は平然とした顔だった事は言うまでもないだろう。

現在は昼食中だ。

「訓練の後のご飯は美味しいな～」

「でも桜の料理の味が忘れられないよ」

「お兄ちゃん、フェイトママと結婚したから最近食べてないな～」

「またその内な」

桜の料理の腕前は以前よりも上がっており、はやてはおろか超一流のシェフも凌駕するほどまでになっていた。

「むしろ料理人とかになった方が良かったんじゃないッスか？」

「俺に喧嘩売ってる？」

「いやいや、冗談ッスよ、冗談」

昼食後全員はデスクワークとなった。

他には機械集団の事。
魔導師集団のことなども調べていた。

「あまりいい情報が無いな」

「しょうがないよ。目撃情報だけじゃ。魔導師集団も局の人間じゃないみたいだし」

「そう言わずめげずに調べ続けてくれ。やらないよりはましなんだからさ」

「ああ、わかってる」

魔導師集団の事を知っているのは、六課では桜とはやてだけだ。
他のメンバーは誰ひとりとして知らない。

（ナインたちがいつどんな行動に出るかわからない。それにあの6冊を狙ったんだ。もしかしたら俺の『死霊秘法』も狙ってくるかもしれない。いつでも行けるように万全な体制を取っておきたいんだけどな）

鬼械神（デウスマキナ）。
魔法と科学の結晶と言ってもいい代物。
質量兵器にもっとも近いものでもある。

そしてその鬼械神を召喚出来る魔導書。
他の物とは段違いの力を誇る魔導書をナインたちは持っているのだ。

『全員！ロビーへ集まるんや！もしくはモニターを見るんや！！大至急や！』

突然流された放送。
何だろうと思い、急いでロビーへ向かう。
そこで見た物とは――

『やぁ、管理局の諸君。初めましてと言っておこう』

そこに映っていたのはナイン。
そしてその後ろにイレンヴン、フィフティーン、トゥエンティー、ハンドレット、ファイズがいた。

『俺の名前は”テリオン”。このアンチクロスのリーダーだ。唐突だが我々、”アンチクロス”はドクタージェイル・スカリエッティとナンバーズ数名と共に――』

彼が言った言葉はまさに予言通り。
この世界を混乱に誘うものだった。

『管理局へ宣戦布告をする』

「な！？」

気がついた時はもう体が動いていた。
すぐさまコンソロールを叩き回線へ割り込む。

「割り込み失礼」

『お前、誰だ？』

「もう忘れたのか？”ナイン”」

『あぁ、お前フォーツーか。いや、”翼の英雄”さん』

「お前、死んだはずじゃないのかよ」

『生き返ったとでも言っておこう』

「そうか。何が目的だ？」

『管理局への復讐。後、お前への復讐だ』

「そう言えばお前、魔導書も奪って行ったな。探してるの、これだろ？」

そう言いながら死霊秘法を取りだし見せた。

その時意外なヤツが反応した。

『何でお前がそれを持ってんだ！フォーツー！』

「トゥエルブ！？なんでお前が！リストには載ってなかったはずだ！」

『いいから答えろ！』

「答える理由はないね。欲しけりゃ力ずくで奪ってみろ。俺は待っててやるからよ。ザコが」

『てめぇ！』

『いい加減にしろガイスト！すまないなフォーツー。こいつ、まだ

魔導書を持ってないものだから焦っていてな。お前の持ってるものが目的の品だから余計焦ってるんだ。だから許してやってほしい』

「ふっ、ザコごとき、眼中にねえよ。だが俺はお前だけは許さない！ナイン！お前は！ファーストを！！」

『ファースト？あぁ、あのバカ女か』

そう言われた瞬間腹が立った。
今にもきれそうなぐらいだったが慌てて押さえる。

「っ！まぁ、いい。どの道、俺とおまえは戦う事になるんだからな」

『ああ。今度はお前を俺が殺してやる。殺される恐怖を味あわせながらな』

「もう一回なぶり殺しにしてやるよ。今度は生きかえれないようになるまでな」

『ふっ。楽しみにしている。ではまた会おう』

そう言って通信は切れた。
こちらも通信画面を閉じ振り返った時だった。

バキッ！！

そんな音を立てながら殴られた。
殴ったのはシグナムさんだ。
殴られて口の中がキレて血の味が滲みだす。

「何すんですか」

「勝手な行動を取った者に罰を与えたまでだ」

「勝手な行動？何言ってんですか？ただ挨拶しただけですけど？」

「それが勝手な行動と言っているのだ。体は成長しても頭はまだ子供のままなのか？」

「・・・喧嘩売ってるんですか？」

「そうとるのは勝手だがあまり調子に乗るなよ。お前がわりこんだのは全次元世界に向けられていたものだ。知り合いみたいだが少しは行動を慎め」

「・・・のに・・・」

「？」

「何にも知らないのに知ったような事を言うな！！」

つい怒鳴ってしまった。
何で怒鳴ったんだ。
理由なんかないのに。
わかんねえな。

「勝手な行動だったって言うことなら謝ります。反省もしますさ。だけど知らないのに知ったような口ぶりで話すのは許せません」

「それが調子に乗ってると言うのがわからないのか？」

「なん――「やめて桜！」――フェイト・・・」

「あとで話、聞かせてもらうから」

「・・・くっ！！」

その時はなぜだろう。
あの時みたいなだった。
そう、研究所でファーストが殺されて、１人になった時みたいだった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「まさかこんなに早く出てくるとわな」

「しかも本当に『死霊秘法』を持ってた。流石エルちゃんね」

「そんなことより！テリオン、早く行かせろ！あいつは俺の魔導書を持ってんだぞ！」

「ガイスト、お前は焦りすぎだ。もう少し待て。その内管理局内で大きな会議があるはずだ。無論やつもその警護に当たるだろう。その時に戦って奪えばいい」

「だが！」

「俺の言う事が聞けないのかガイスト。これ以上言うならあいつじ

ゃく俺がお前を殺すぞ」

「・・・ちっ。わかったよ」

「わかればよろしい。ネロ、カリグラとクラディウス、それとティトゥスは何処にいる？」

「ティトゥスは自室で鍛錬、カリグラトクラディウスは不明」

「もしバカやってたら連れ戻せ。いつでも戦えるようにしとけと伝えとけ」

「了解」

「もう少しだ。もう少しで仇が取れる。ナインティーンの仇がな」

第０４話　宣戦布告（後書き）

次回、つに桜の過去が明らかに。

ファーストとは、ナインティーンとはいったい何者なのか。

桜とテリオンの一体どんな関係者だったのか。

それは次回のお楽しみです。

キャラ紹介２

アンチクロス

名前：テリオン（ナイン）

年齢：不明。外見１７歳

性別：男

身長：１７０ぐらい

体重：５０ぐらい

容姿：短めのストレート

性格：冷静沈着。感情を表に出す事が少ない

デバイス：ナコト写本
ＢＭ（バーミンガム）

術式：ベルカ式

魔力光：紅

魔力ランク：推定Ｓ

魔導師ランク：推定Ｓ

眼の色：黄色

髪の色：金髪

備考：Ｎｏ０９。
桜と同じく失敗作。
親友Ｎｏ９０（ナインティーン）
を桜に殺されたことから復讐を決意する。
破壊されたはずのナコト写本を持っている謎の男。
鬼械神（デウスマキナ）はリベルレギス（改）。
アンチクロスのリーダー。

名前：ティトゥス（イレヴン）

年齢：不明。外見１７歳

性別：男

身長：１８０ぐらい

体重：６０ぐらい

容姿：デモンベインに出てくる人と同じ

性格：好戦的でバトルマニア

デバイス：エイボンの書
Ｄ（デーモン）

術式：ベルカ式

魔力光：黒

魔力ランク：推定Ａ

魔導師ランク：推定Ｓ

眼の色：紫

髪の色：黒

備考：Ｎｏ１１。
どっかの剣豪のクローンの失敗作。
シグナム以上のバトルマニア。
強いヤツを見ると戦いたくてしょうがなくなる。
桜に何度も殺されかけてるため恨みがある。
鬼械神は皇牙（おうが）。
二刀流の剣術を使う。

名前：ガイスト（トゥエルブ）

年齢：不明。外見１７歳

性別：男

身長：１６６

体重：５０ぐらい

容姿：劇場版ギルガメッシュ見たいな顔

性格：攻撃的。感情を出しやすい。挑発に乗りやすい

デバイス：魔導書なし
ＴＳ（トリックスター）

術式：ベルカ式

魔力光：蒼

魔力ランク：推定ＡＡ＋

魔導師ランク：推定ＡＡ

眼の色：蒼

髪の色：水色

備考：Ｎｏ１２。
アンチクロスで唯一の魔導書なし。
桜にザコ呼ばわりされて
何度も負けているので恨みがある。
幻術を使えるのだが桜にはあっさり見破られる。
アンチクロス一のザコ。

名前：ネロ（フィフティーン）

年齢：不明。外見１６歳

性別：女

身長：１６０ぐらい

体重：不明

容姿：単発だがポニーテール

性格：陽気。意外に抜け目がない

デバイス：ドール讃歌
ＳＳ（ステルス）

術式：ミッド式

魔力光：白

魔力ランク：推定Ａ

魔導師ランク：推定Ａ

眼の色：翠

髪の色：瑠璃色

備考：Ｎｏ１５。
頭がキレる頭脳派。
だが考えすぎる事もあり

自分の考えた策におぼれる事もある。
一番最初に魔導書に認められた人物。
鬼械神はネームレスワン。
砲撃が得意。

名前：ティベリウス（トゥエンティー）

年齢：不明。外見１９歳

性別：女

身長：１８０ぐらい

体重：７０ぐらい

容姿：髪を腰ぐらいまで伸ばしている。
なぜか途中で伸びが止まっている。

性格：寡黙。意外に物好き

デバイス：ルルイエ異本
ＡＢ（アビス）

術式：ベルカ式ミッド混合

魔力光：青紫

魔力ランク：推定ＳＳ

魔導師ランク：推定ＡＡ

眼の色：黒

髪の色：緑

備考：Ｎｏ２０。
　ルルイエ異本に初めて認められた人物。
　魔力量が多いため本に吸い取られていても平気。
　鬼械神はダゴン。

名前：クラディウス（ハンドレット）

年齢：不明。外見１４歳

性別：少年

身長：１５０ぐらい

体重：４０ぐらい

容姿：デモンベインに出てくるのと同じ

性格：陽気。悪ふざけが多い

デバイス：セラエノ断章
　Ｆ（フェザー）

術式：ベルカ式

魔力光：翠

魔力ランク：推定Ａ

魔導師ランク：推定Ａ

眼の色：黄色

髪の色：赤

備考：Ｎｏ１００。
外見では普通の少年だが正体は殺人犯のクローン。
殺すことを楽しむのだが
桜に邪魔をされて殺された事を恨んでいる。
鬼械神はロードビヤーキー。
風の力を操れる。

名前：カリグラ（ファイズ）

年齢：不明。外見２０代

性別：男

身長：１９０ぐらい

体重：８０ぐらい

容姿：短髪

性格：おとなしいが怒らせると手がつけられない

デバイス：水神クタァト（フィスト）
F

術式：ベルカ式

魔力光：青

魔力ランク：推定Ａ＋

魔導師ランク：推定Ａ＋

眼の色：黒

髪の色：黒

備考：Ｎｏ５５５。
巨漢の大男。
岩おも簡単に粉砕できる怪力を持っている。
普段はおとなしい方なのだが
怒るとテリオン意外抑えられない。
鬼械神はクラーケン。

あの世の人物

名前：アテナ

年齢：不明。外見１８歳

性別：女

身長：なのは達と同じぐらい

容姿：ティアナに似ているが何処となくちがう

体重：不明

性格：極めて普通。
何の特徴もありません。

眼の色：青と緑のオッドアイ

髪の色：オレンジ

備考：天国の神様。
桜を死神にした帳本人。
死者の脱獄にひび頭を悩ませている。
アルとはお互い親友？の仲。
元人間。

名前：ファースト

年齢：不明。外見１６歳

性別：女

身長：１６０ぐらい
容姿：フェイトの子供のころ。
　そして髪を短くした感じ
体重：不明
性格：不明
眼の色：めっちゃ薄い水色
髪の色：黄色
備考：Ｎｏ０１。
　桜の昔の相方。
　ナインが投げたナイフから桜を助けて死亡。
　死に際に桜に好きだよと告白。
　本人はその時はその意味がわからなかった。
　現在は頑張って働いている。
　アテナにサービスしてもらったため
　あと１００年ほどでいいそうだ。

第05話　ファースト

「桜、どうしてあんなこと言ったの？」

「・・・」

先ほどの宣戦布告の後。
桜は1人、部屋にいた。
フェイトが後からやってきて話をしようとしているのだがだんまりの状態である。

「話してくれないとわかんないよ？」

「・・・はぁ、わかった、話すよ」

「で、どうしてあんなこと言ったの？」

「頭に血が乗っただけ。もっと言えば・・・ヤツ当たりかな」
あの時は頭に血が上っていてつい怒鳴ってしまった。
ヤツ当たりみたいに当たってしまったんだ。

「ちなみに聞くけどファーストって誰？女の人みたいだけど」

笑顔で聞くフェイトだが目が笑っていない。
たぶん怒っているのかな？

「え、えっと8年前、あ、俺にとっては11年前か。その時に知り合った人だよ」

「ふ～ん。え？８年前？」

「そ、８年前」

そう、８年前と言うとまだ桜が研究所にいたころだ。
警戒心むき出しの桜をどうにかして唯一組んでいた人物。
それがファーストだ。

「俺が唯一仲間と認識していた人。信じてはいなかったけど最終的には信じちゃった人。俺を助けたせいで死んだ人。昔はわからなかったけど今ではわかる。あの人を俺が好きで、あの人も俺が好きだった。そんな仲だ」

「・・・そっか」

「あ、今考えればあれ俺のファーストキスじゃん」

「え？」

「あ、いや、こっちの話」

「ファーストキスって何のことなのかな？」

ずいっと顔を寄せて聞くフェイト。
いきなりのことで少しビックリしてしまう。

「え、えっと、ファ、ファーストが死に際に――「ん」――むぐ」

いきなりキスをされた。

おかげで続ける事が出来なかった。
それにしても長いな。

「ぷはっ、フェ、フェイト？」

「えへへ。桜の初めてじゃなかったのは残念だけど、こうして桜とたくさんキス出来るからいいんだ♪」

「そ、そうか（ビックリした。怒られるんじゃないかと思った）」

「そ、そうだ、ここ桜の部屋だし／／それにちょうどベッドの上だから／／」

「へ？」

自室＋ベッド＋落ち込み＋立ち直り＋２人きり
あれ？これってやばいんじゃね？
別に結婚してるから平気だとか。
１８過ぎてるから平気とかじゃなくてやばくね？
俺、まだ結婚して２ヶ月も経ってないよ？

「あ、ちょ、フェイト？流石に待とうぜ。俺、まだ仕事残ってるし、それにいくら自室と言っても隊舎の中だし、それにまだ結婚して２ヶ月も経ってないぞ？」

「いやなの？」

何でそこで泣きそうになるんだよ！！
やめてくれ！断れないから！

その時だった。

こんこん

とドアを叩く音がする。
誰だか知らんがナイスタイミング！！

「桜、ちょっといいかな？」

母さんだ！
あれ？
自室＋フェイトと2人きり＋フェイトはベッドの上
これって見つかったら死ぬんじゃね？
仕方ない。
ドアを軽く開けて受け答えするしかない。

「な、何？」

「あ、そんな用ってわけじゃないんだけどね。後ではやてちゃんが来てほしいって」

「うん、わかった。ありがと」

「それとさっきは――」

「ああ、大丈夫！さっきは頭に血が上ってただけ！もう大丈夫だから、心配しなくていいよ」

「あ、うん。それじゃ」

ふぅ、危なかった。
もし見つかってたら大変なことに・・・。
「フェイト、俺、はやてさんに呼ばれたから」
「う、うん、わかった」
どうしてそんな寂しそうな顔するの！？
困るよ、俺。
「あ、私も仕事残ってたんだ」
「そうか。じゃ、後でな」
「うん」

sideout

「ティベリウスはどうした？」
「・・・ここに」
「ルルイエ異本の調子はどうだ？」
「・・・良好」
「お前、何隠してる？」

「・・・・・・ネコ」

「はぁ、全く物好きだなぁおい。どうするつもりだ？」

「・・・？」

「考えてなかったのかよ」

「・・・（コク）」

「お～い、ネロ。こいつどうにかしてやって」

「え～、いいじゃない。私好きよネコ」

「飼うのか！？」

「・・・（コクコク！！！）」

「でも無理なもんは無理だから逃がそうね」

「・・・・・・（ショボ～ン）」

「そんなに落ち込むなよ・・・」

第０６話　準備開始

「失礼します」

先ほど呼ばれたいたらしいのではやてさんの元へ。
いやな予感しかしない。

「桜、さっきの行動はウチもあんまり感心できへんな～」

「・・・」

「あれに関してはウチらが受け持つことになった。何があったかは知らんけど勝手な行動は慎むこと。ええか？」

「わかりました」

「それとこっちが本題や。後日大きな会議あるんや。無論わかる通りその警護に当たる。メンバーの詳細とか知ってたら教えてほしいんや」

「・・・わかりました。全員集めて下さい」

ロビーへ全員を集めて緊急の対策会議。
それとこれからの方針の報告だ。

「まず、こいつ。ナインは飛び道具をよく使う。距離を取るのはいいけど取りすぎには注意だな」

ナインの特技は飛び道具を使うこと。

近接もできるが遠距離、中距離もできる厄介なヤツ。
倒すには攻撃の隙をつくしかない。

「次はこいつ。イレヴンは近接戦闘のプロだ。距離を取って戦うのもいいけどナインの援護があると近距離戦に持ち込まれやすいから気をつけること」

イレヴンは1対1だったら遠距離。
ナインなど援護出来るヤツがいると中、近距離になる。
勝つには正攻法の実力で勝つか、先手必勝の不意打ちで勝つかのどちらかだ。

「次はこいつ。トゥエルブの場合幻術を使ってくる。近接しかしてこなくて挑発に乗りやすいからそれを利用して戦うように」

トゥエルブは・・・ザコだからあんまり詳しくしらない。
幻術は何故か簡単に見切れたし。
攻撃もワンパターンだから簡単に倒せるはず？

「で、次にこいつ。フィフティーンは頭の切れる一種の天才だ。自分の策におぼれる事があるからそれを狙うといい。あんまり深追いしすぎるとあいつの思うつぼだから気を付けること」

フィフティーンはまずイレギュラーの登場に極端に弱い。
自分のプランの中に組み込まれていない者はまずどう対処していいかわからなくなる。
一番いいのは不意打ちの先手必勝で倒すこと。

「次はこいつ。トゥエンティーはまず魔力量が多い。だいたいＳＳ以上はある。デバイスなしで魔力弾作ったりできるつわものだ。砲

撃とかもできるようになってるかもしれないから最速で倒すことを目指す事」

一番ってわけじゃないけどこいつにも苦労した。
殺傷設定でいきなり魔力弾撃ちこんでくるからな。
勝つには魔力切れまで粘るか、強力な一撃を入れるかのどっちか。

「次にこいつ。ハンドレットは動きが素早い。あと、相手をなぶり殺しにするのが大好きだからたぶん手を抜いて遊んでくるだろうな。ガキの鼻へし折ってやるのは簡単だけど動きを止めないとダメだ。どれだけ動きについていけるかが勝負のカギだ」

素早い動きにはトラップを仕掛けてやればいい。
あいつが動きすぎてれば勝手に引っかかってくれるはずだ。
俺の場合は床にナイフ刺してたら勝手に足切ってくれた。

「最後にこいつ。ファイズは怪力野郎だ。たぶんスバルさんでも勝てないだろうな。怒らせると手がつけられないからまためんどい。ただ、バカだから対策はいくらでも取れる。戦略を戦術でつぶされない努力も必要だな」

バカだからバカ力の持ち主だ。
でもバカだから簡単に倒せるはずだ。
なんも間違えなければだがな。

「それとこれからの六課の方針が決まった。これからはあの”アンチクロス”と名乗る組織とスカリエッティ一味を追う事に全力を注いでもらう。それと後日、大きな会議があり、ウチらはその警護に当たる。大きな確率でアンチクロスとスカリエッティ達は襲ってくる。そのために今回桜からあいつらの情報をみんなに教えてあげた

んや。これからはそれを対策とした訓練をやってもらうから頼むな」

『はい！』

こんな感じで対策会議は終了した。
午後の訓練はアンチクロス対策の訓練に変えてやることになった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「よし、全員いるな。後の管理局の会議の奇襲についてだ」

「どういうプランかはだいたい決まってるんでしょ？」

「ああ。プランはまず全員鬼械神で１２時、２時、４時、８時、１０時、この５方向から地上本部へ攻める」

「それ奇襲になってねえんじゃねーの？」

「いいんだよ。あくまで地上本部の壊滅が目的だから。局員はあんまり殺すなよ。恐怖を植え付けてやるんだ」

「りょーかい」

「なぶるのは好きではないがまぁ、いいだろう」

「次に内側からの破壊だ。地上本部を可能な限りぶっ壊せ」

「・・・」

「フォーツーはどうするんだ？」

「たぶんあいつも来るだろう。殺すなよ。あいつは俺が殺す」

「あいつは死霊秘法を持っている。鬼械神を出されたらどうするんだ？」

「5対1で出てくるバカじゃないさ。ま、出てきたら殺してやるけどよ」

「あとは各自、自分の判断で行動しろ」

『了解』

第07話　戦いの始まり

宣戦布告された日から約2週間。
ついに大会議の日がやってきた。

「さて、じゃ、今日の配置を伝える。スターズは内側の警備担当。ライトニングはその周辺、つまり外の警備だな。で、俺らウイングスはさらに外側、市街地まで警備する。しっかり巡回すること。わかったか？」

「わかった。だが何故そんなに遠くまで警備する必要があるのだ？」

「念には念を入れてだ」

現在会議が始まる1時間程前。
ギンガさん、チンクさん、ノーヴェさん、ディエチさん、ウインディの隊長である俺は5人に今回の会議についてを説明する。

「前みたいな事が起こらないといいんだが」

「起こったとしてもすぐさま解決すりゃいいんじゃねえか？」

「そうだな。よし、気合い入れていくぞ！」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「全員、準備は整ったか？」

「すでに出来ている」
「あたりまえだ」
「ＯＫ」
「・・・完了」
「できてるよ」
「できてるぞ」
「よし、全員、召喚しろ」
「エイボンの書よ！」
「ドール讃歌！」
「・・・ルルイエ異本」
「セラエノ断章！！」
「水神クタァト！！」
「ナコト写本。エセルトレーダよ」
ｓｉｄｅｏｕｔ

現在ヴィヴィオ達は学校が終わったころ。
今日は大会議がある事なので来なくていいと言われているそうだ。

「もしもし？」

『あ、ヴィヴィオちゃん？みんなもいるのね？』

「アイナさん？」

通信の相手はアイナだった。

『もしよかったら何だけど、クラナガンにある紅茶の葉を売っているお店で茶葉を買ってきてほしいの。いつも使っているのが丁度無くなっちゃって』

「はい、わかりました」

「本当？助かるわ。場所はわかるかしら？」

「地図をクリスに送ってもらえれば・・・」

「わかったわ、送るわね。機動六課にって言えば後日まとめお金を
て払うから大丈夫よ。それと、量とかは向こうの人がわかってるか
ら安心してね」

「わかりました！じゃぁ、行ってきます！」

「お願いね。もしわからないことあったらいつでも連絡してね」

そう言ってアイナとの通信は切れた。
その後すぐに地図が送られてきたから４人で行く事に。
リニアレールに乗ってみんなで首都クラナガンへ向かうのであった・・・。

ｓｉｄｅｏｕｔ

「ふぅ、いったん休憩に入るか」
現在、大会議が始まって２時間程経っている。
”今の所は”何の異常もない。
「全員、休憩に入っていいぞ」
『私達はもう少しあるので、お先に』
「そうなのか？悪りぃな。じゃ、お先」
警備から少し離れた場所に移動して昼食を取る事に。
『突然ですまないが、今度は私の話しに付き合ってもらっていいかね？管理局の諸君』
いきなり市街地のモニターにあいつが映った。
そう数年前脱獄した――
「ジェイル・スカリエッティ・・・！」

スカリエッティの登場と同時に向こう側で大きな音が響く。
そう、まるで大きな足音のように。

「あ、あれって！」

眼に入ったのはまぎれもなく鬼械神であった。

第08話　4対1

「あ、あれは・・・」

記憶の中を必死に探す。
アルハザードにいたころアルの持っていた本に書いてあった鬼械神だ。

「クラーケン・・・！」

みつけた。
巨大な装甲に伸びる腕。
『水神クタァト』から呼びだせる剛腕の鬼械神（デウスマキナ）。

「フォーツー！！」

「その声。トゥエルブか！」

突然聞こえた声。
その声と同時に襲いかかる男。
それは「アンチクロス」の1人、トゥエルブだ。

「さっさと死霊秘法を渡しやがれ！！」

「いやだね。ザコに扱えるほどこの本は優しくないぞトゥエルブ？」

「今はガイストだ！それと俺はザコじゃない！」

「おっと。全員、聞こえるか？」

戦闘を続行しながらも通信できるか確かめる。

『聞こえてます。何かあったんですか？』

「悪い、戦闘に入ってるから手短に話す。俺はそっちに行けないから、ギンガさん、指揮を取って行動を――「戦闘中に余裕だな！」――おわっ！とりあえずこっちは終わり次第合流する！」

『わかりました』

「ガジェットまで出てきてるのか・・・。面倒だな。それにしても・・・」

振り向きトゥエルブを見ながらあざ笑うかのように言った。
半分は挑発も含めてだ。

「お前だけ魔導書持ってなくて鬼械神を出せないのはかわいそうだな～。あ、お前がほしいの俺が持ってんだっけ？ゴメンゴメン、お前じゃアルハザードに行く事が出来ないから持ってないの当たり前か」

「てめぇ、喧嘩売ってんのか？」

「あれ？そんなのもわかんないの？やっぱトゥエルブはザコでバカだよな～」

「ふざけんじゃねぇ！！！」

かかった。

やっぱ挑発に乗りやすいって嬉しいね。
簡単に策にハマってくれるから。

「はあぁ！！」

ｓｉｄｅｏｕｔ

スターズ。
なのは達はスカリエッティが出てきてからガジェットを確認すると
地下通路で迎撃に当たっている。
幸いなことに鬼械神は襲ってこない。
なのでこうして地下通路で迎撃に当たれるのだ。

「この辺りの反応はもうないみたいですね」

「よし、他の隊の援護に急ごう」

「「はい！」」

なのは達が動こうとした時だった。
突然あたりが揺れだす。
大きな音がどんどん近付くように大きくなって行く。

「ま、まさか！」

「あれが動き出した！？」

「ここが崩れないうちに急いでここを脱出しなくちゃ！」

そう言ってスターズは地上へ向けて走り出したのであった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

なのは達が地上へ向かっているころ。
地上本部の外では警備に当たっていた局員がガジェットたちを迎撃していた。だが強化されているガジェットの大軍に被害は増えるばかり。
そんな中、フェイト、エリオ、キャロ、フリードもガジェットたちに対して奮戦していた。

「はあああぁぁぁ！！！」

ザンバーフォームで横に一閃。
ガジェット３機をまとめて切り裂いた。
切り裂かれたガジェットは爆発、部品をあたりにまき散らす。
そんな中一体のガジェットがその横を駆け抜けてゆく。

「っ！？」

だがそれは一瞬でバラバラになり破壊された。
破壊されガラクタとなったガジェットは爆破を起こす。

「ナイスだよ、エリオ」

「はい」

「中はどうだった？」

「中で警備に当たってた人たちの半分は地下通路の方に、残りはこっちの方に参加してるみたいです。でも、中はもう負傷者で一杯で・・・」

「そっか・・・。桜は？」

桜の行方を聞くがエリオは首を横に振ることしか出来ない。
通信妨害、ＡＭＦが強いため念話は通じない。

「負傷者を本部へ運びましょう」

「うん。援護するから、急ごう」

ライトニングは本部へ負傷者の搬送。
その後シグナム達と合流。
クラナガンへと向かうのであった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

『フェザーシュート』

状況は極めて危険だ。
ガジェットの大軍。
それだけなら桜は１人で何とかできる。
だが、それにアンチクロスのメンバーが加わったらどうだろう。
ただでさえ強い魔導師にＡＭＦというハンディを背負いながら戦う

と言うのは誰であろうと無理に等しい。
現在桜は移動しながらガジェットの掃討。
それとアンチクロスとの空中戦だ。

相手はイレヴン、トゥエルブ、ファイズの３人。
今、アンチクロスは全員鬼械神から降りて戦っている。
３対１。
普通の魔導師相手であれば桜にとっては簡単に倒せるものだ。
だがＡＭＦが強い状況で推定Ａ以上の魔導師３人を相手に勝てるのだろうか。

『ツインソード』

「くっ！」

「フォーツーよ。前世の恨み、ここで晴らす！」

（やばい。この状況はどう見たってやばい。トゥエルブとファイズだけならまだどうにかなったのに！まさかイレヴンまで来るとは・・・！！）

「死ね！！」

カリグラの巨大な一撃。
その攻撃を紙一重でかわした桜。
外れた攻撃は近くのビルに当たった。
ビルはいとも簡単に倒壊して行く。
バカ力は健在ということだ。

「・・・くっ！ニトクリスの鏡！！」

幻術で姿をくらませる桜。
それを見た3人は動きを止めてあたりを見渡す。
そしてみつけた。

「そこか！」

「がはっ！！」

いとも簡単に見切られた。
不可視にしていた部分はガラスのように砕けはがれていく。

『ヴァリス』

「ハァ、ハァ、ハァ・・・」

「流石に3人も相手にするときついだろう？」

「ぬかせ。俺はお前ら7人を相手にして勝ったんだぞ？きついわけないだろ」

「ふっ。減らず口は治ってないようだな」

「お互い様だろ」

「そのようだ」

銃を構え撃ったと同時に後ろへ下がる。
距離を取りながら戦えばいくらかは勝機があるだろう。

だが――

「よお、フォーツー。元気してた、か！！」

「うわっ！！」

いきなり後ろに現れたハンドレット。
少し背の低い少年のような魔導師。

「おいおい、マジかよ・・・」

もはや桜に勝機などなかった。

第０９話　ナンバーズ

「おいおい、マジかよ・・・」

眼の前には４人。
イレンヴン、トゥエルブ、ハンドレット、ファイズ。
１対１であれば勝機はあった。
だが４対１となると話は完璧に違う。
これに勝てと言う方が無理なのだ。

「うぅおりゃ！！」

攻撃が来てはかわす。
かわした所でまた攻撃が来る。
それをかわしてもまた攻撃が来て当たってしまう。
完璧に詰みだ。

「痛・・・」

左手負傷。
片手だけで４人を相手に勝てるほど甘くない。
痛みが走る左手に力を入れしっかりとＺＥＲＯを握りこむ。
そして構えた。

「こんな所で負けてらんねえな。アルに笑われちまう」

常にそばにある本を見てそうつぶやく。
今は姿亡き相棒を守るために。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ウイングスは現在、スバルとティアナと合流。
地上に残っているガジェットの掃討へ当たる事に。

「こ、これは・・・」

「ひどい」

「ガジェットじゃこんな器用に出来ないッスね」

「一体だれが・・・」

「私達がやったのよ～」

突然上から声が聞こえる。
急いで見上げればそこには――

「トーレ姉、クワ姉、セッテ・・・。それにウーノ姉まで」

「どうして、ここに・・・」

そこにいたのは脱獄したナンバーズ。
トーレ、クワットロ、セッテだった。
ウーノはモニターの向こう側に居る。

「どうしてここにだと？決まっている。ドクターのためだ」

『私たちはドクターとこれからもずっと一緒よ。ドクターの願いを叶えるために』

「そうよ～ん。私たちはドクターに助けてもらったの。だから、ドクターのために前よりも精一杯お手伝いするのよ～」

「それで、今は管理局の者たちを殲滅している最中です」

そう聞いた瞬間もう一度あたりを見回す全員。
そして、振り向き聞いた。

「まさかここに居る局員たちもやったのか？」

「ええ。先ほどまでここで戦闘をしていましたので」

「しかし、管理局も強くなったと聞いていたが拍子抜けだ。何とも、脆く弱い」

鼻で笑うトーレ。

クワットロはクスクスと笑っている。

「いくらなんでも」

「これはやりすぎなのでは？」

「ほう、こんなやつらに情をかけるようになったか」

「な！？」

トーレの返事に驚く４人。
帰ってきた返事に驚いて声を漏らしてしまった。

「お前たちはこいつらと一緒にいたからそんな性格になってしまっただけだ・・・」

「そんなことない！」

トーレの声を遮るように声を出すディエチ。
そんなトーレを見かねたウーノがせかす。

『トーレ、時間が無いわ』

「ああ、すまない」

『チンク、ノーヴェ、ディエチ、ウェンディ・・・。また私たちの元に戻ってきてほしいの。ドクターも、あなたたちの力を頼りにしてるわ。戻ってきてくれたなら、もっと強くなることができるわ。私たちも、また以前のようにまたみんなでやっていきたいの・・・』

ウーノから出てきた言葉は、４人にスカリエッティの元に戻ってこいということであった。

「そんな奴らと暮らしていて良いはずがない。戻ってこい」

「そうよ～。前みたいに、一緒に楽しくやって行きましょう～」

「私も、待ってます・・・」

「・・・断る」

チンクは断った。
きっぱりと、誰がどう聞いても「断る」と言ったのだ。

「姉は今の生活で満足している。確かに、以前の事件のせいで多くの人から辛いことを言われるのも事実、この世界が辛いことばかりなのも事実だ・・・。だが、それでも変わらず接してくれる者たちもいる・・・。それがどれほど嬉しいことか、姉は学んだ・・・」

「チンク・・・」

スバルもギンガもチンクの言葉にほほ笑んだ。
ノーヴェ達も同じような笑顔だった。

「それに今の私には父が、姉が、家族がいるのだ。戦闘機人としてではなく、１人の人間のように、普通の人と変わらなく接してくれる優しい家族が、多くの人たちがいるのだ。姉や妹たちに、闘うこと以外で生きる道を教えてくれた、その人たちを姉は裏切ることができない！！」

その言葉にティアナもほほ笑んでいる。
全員の笑みは戦場にあっていいものだろうかと思うぐらいい笑顔だった。

「隊長も裏切ることもできん！姉たちを信用してくれて、一番最初に１人の人間として扱ってくれた人を裏切ったら絶対に後悔する！だからそちらに行くことなどできない！それに、みんなが変われたのだ、お前たちも自分から変わることを望めば変わることができるはずだ！だから――」

「そうか。残念だな。クアットロ」

「は～い」

コンソロールを叩き始めるクアットロ。
叩き終わった瞬間辺りにガジェットが現れる。

「な！こんなに！」

「こちらに来ないならばもう用はない。消えろ」

かつての仲間との戦い。
彼女たちの取って最もつらい戦いが始まったのであった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

通信も念話もできない状態。
そんな中１人４人の相手をしている桜。

（リミッター解除申請をしたいけどはやてさんに連絡できなきゃ、なんも始まんない。どうすれば・・・）

連係プレイ。
８年前同様にあいつらのコンビネーションはすごい。
まさしくつけどころが無いと言ってもいい。

（ファースト、俺、どうしたらいいんだ？俺はお前がいてくれたから・・・）

今はもういない相方。
好きだった人に助けを求めても無理だ。

（助けを求めるなんて、ホントいつぶりだろうな）

再び構えなおして立ち向かう。

（単独行動なんていつもの事じゃねえか。助けなんか求めてたら英雄の名が泣くぜ！）

負けるわけにはいかなかった。
相棒との約束を果たすため。
生き続けるために。

キャラ紹介3（前書き）

キャラ紹介から抜き取りました。
ついでにいろいろと変えました。
追加した部分もあります。

キャラ紹介３

名前：炎髪妁眼の死神（桜）

年齢：不明。外見だけでは８～９歳ほど

性別：少年（男の娘）

身長：１４０もない

体重：３０ぐらい

容姿：炎髪

もっと言うなら「妁眼のシャナ」

性格：感情的で僕っ子

デバイス

・アル＝アナザー（融合機）

備考：ジャスティスに魔力を吸い取られた後に

アテナの元へ連れてこられ、正式に融合機となった。

「アジフ」から「アナザー」へ変えた理由は不明。

アテナの相手が飽きたため桜を死神へ推薦する。

性格などはほとんど変わっていないが

一人称などが変わっている。

現世での一人称は「私」になっていて、

言葉使いが変わり、上から目線が治っている。

・死霊秘法　（ストレージ）

召喚出来るもの
・クトゥグア（自動式拳銃）
・イタクァ（回転式拳銃）
・万死ヲ刻ム影（大鎌）
・大剣シラード（大剣）
・刺し穿つ死刺の槍（突き穿つ死翔の槍）
・炎剣レーヴァテイン（長剣）
・氷剣アイスベルグ（短剣）
・デモンベイン【運命（ディスティニー）】
備考：クトゥグアとイタクァ意外のものが全て変わっている。
　現世へ戻る際ページ更新をしたためこうなった。
　容量も増加されて武器の数も増えている。

レアスキル（数個）
・死神（デスサイズ）
備考：殺した者、もしくは死んだ者
　死んだことのある者の魂が見える。
　その魂を直接あの世へ送れる力。
　死んでも死ねない不死身で不老不死の体を与え、
　致命傷だけは超速再生される。
　死神であれば必ず着く能力。

・狂化（バーサーカー）
備考：左腕にある紋章がつく。
　その紋章を自分が傷つけることで発動。
　獣のような力と素早さがステータスに追加される。
　理性は残ったまま。
　使う場合は仮面を付けないと嫌だそうだ。
　（使った時の顔があれだから）
　傷つけた紋章は一日寝れば治る。

・騎士(ナイト)は徒手(オブ)にて死(オーナー)せず
備考：他人のデバイスを使いこなせる力。
使う場合は奪うかどおにかしてデバイスにマスターと
誤認させる。
元の持ち主よりもデバイスの性能を十二分に発揮できる。
ユニゾンデバイスも同様に出来る。

・二重融合(デュアルユニゾン)
備考：同時に2人まで融合する事が出来る。
メインはアルと誰か。
使う事が無いだろうとは桜は思っている。

・魅惑(チャーム)
備考：アテナが”うっかり”（わざと）付けてしまったスキル。
桜自身、アルですら知らないためどういうスキルかは不明。

変換資質：炎、雷、氷結、風

術式：スター式（混合なし）

魔力光：漆黒

眼の色：灼眼

髪の色：炎髪

趣味：特に無し

好きな人：特にいない

備考：ガジェットの自爆からなのはをかばって死亡。
魂だけアテナの元へ連れてこられた。
そして強制的に死神にされ現世へ戻る事に。
アテナからチート的な能力を貰い、ナインたち死者を
もう一度殺してあの世へ連れて帰るのが使命。
それが終わっても解放される事はない。
死神の力で寿命では死ぬことができず
心臓を撃ち抜かれても、頭を砕かれても死ねない。
桜であって桜ではないためアテナに
「別人をよそおりなさい」と言われて言る。
なので六課全員に正体を明かせない。
アテナに勝気で、感情的な僕っ子に強制的にされた。
そのため桜の面影を残せなくなっている。
中性的な声をしているため最初は誰もが女と間違う。
（外見は完璧な女の子）
六課ではよくちやほやされたり。

ステータス
筋力：Ａ＋（見た目より力持ち）
耐性：Ｂ（体が子供だからしょうがないだろ）
敏捷：ＥＸ＋（小ささを生かすため）
魔力：ＥＸ＋＋＋（チートだから当たり前だろ）
幸運：Ｃ　（死神ですから）
宝具：ＥＸ＋（チートだからね～）

イラスト

>i2055 8—2054<

第１０話　エース・オブ・エース（前書き）

なんとなくいろんな曲を聞いてたらこの小説のテーマソングが決まりました。

テーマソングは水樹奈々さんの「Ｅｎｄｌｅｓｓ　Ｄｒｅａｍ」です。

似合わないかな？

第１０話　エース・オブ・エース

現在、なのは達ははやて達と合流。
その後フェイト達とも合流し街の方へと向かっていた。

「ん？あれ！！」

「どないしたん？」

「あの建物にガジェットが集まってる」

ヴィータが発見した建物。
ショッピングモールだった建物にガジェットが集結していた。

「まさか取り残された人が」

「ありえるね」

「行くで！」

はやての言葉で全員が動き出す。
フェイト、ヴィータ、シグナムが先行し、後ろから残ったメンバーが援護する。

「ガラスの向こうに子供が見えた！たぶん逃げ遅れたんだと思う！」

「なら救出するで」

「私が行くから、援護お願い」

「了解や。エリオとキャロはついて行ってあげて」
「「はい！」」
なのはが救助に向かう。
その後ろからフリードに乗ったエリオとキャロが援護する。
「ＲＨ！」
『オールライ。アクセルシューター』
「シュート！！」
「なのはさん！ここは僕とキャロが押さえます！」
「その子たちをお願いします！」
「ありがとう！！」
２人から離れた場所まで移動するなのは。
ガラスを破り中へ入る。
走りながら子供たちの元へ向かうが――
『止まって下さいマスター！！』
「え！？」
突然ＲＨに止められた。
何事だと言わんばかりに驚くなのはだった。

「ざ～んねん、遅すぎますよ～」

突然声が聞こえる。
その声が聞こえるのと同時に子供たちが音もなくその場から消え去った。

「こ～んな罠にひっかるなんて、本当にエースなのかしら～？」

「っ！？この声・・・。まさか・・・」

「はぁ～い、お久しぶりですね～」

「クワットロ・・・！」

聞こえた方へ振り替えるなのは。
そこにはクアットロの大量のガジェット。

「どうしてあなたがここに・・・」

なのはレイジングハートを構え、クアットロに問いかける。
その問いにクスクスと笑いながら答えたクアットロ。

「随分なご挨拶ね～。この状況を見てわからないかしら？」

「やっぱりこれはあなたたちが。どうしてこんな・・・」

「ドクターが新しく開発されたもののテスト・・・と答えれば満足かしら？」

「・・・あなたたちは！」

そう言ってなのははクアットロを睨む。

「良い顔ね～。でも・・・私の相手なんてしてていいのかしら～？」

「え？・・・っ！？」

なのはは咄嗟に右に飛ぶ。するとそこには？型のケーブルが床に叩きつけられた

「うふふふ・・・。さぁ・・・踊りなさい」

ｓｉｄｅｏｕｔ

「エクシード、ドライヴ！」

ここで最後の切り札を使う。

勝ち目がないとわかった時点でこのカードを切らなければいけないだろう。

『フリーダムウイング』

「ドラグーンビット、４機展開」

黒と青の翼。
青の部分はビットとなり空中に現れる。

「モードヴァリス固定。射撃はフォトンランサー固定」

『固定完了』

「フェザーシュート、セット。フル・・・バースト！！」

一斉射撃。
リミッターとハンディのある状態ではこれが最大の攻撃。
だが――

「こんなので俺たちを倒せるとでも？」

相手は無傷。
これで、完璧に勝機はなくなった。

「捕まえた！！」

「な、いつの間に！」

後ろに回り込んでいたカリグラに腕を掴まれはがいじめにされる。
身動きが取れない状態になった桜。
この時、桜は知らないだろう。

もう少しで自分が死ぬことになるのを。

第１０話　エース・オブ・エース（後書き）

ついに桜の死亡フラグ！！

あと、数話で死にます！！

第11話　アンチクロス

キャロとエリオ、フリードはなのはの援護を未だに続けていた。
建物の近くでガジェット?型の改良型と戦闘している。
だが、改良されていることもあり、二人は苦戦していた。

「キャロ!僕が囮になって敵を集めるから一気にやろう!」

「わかった。・・・気をつけて」

「うん。ストラーダ!」

『デューゼンフォルム』

エリオはストラーダをデューゼンフォルムにしてフリードから飛び降り、噴射口からバーニアを吹かせ、刃の部分に魔力刃をつけ斬れ味を更に強化し?型へと突っ込んだ。
そのまま直線状にいた一体を斬り裂き、ノズルの出力を上手く調節してターン、再び違う一体に斬りかかる。
エリオが危険と判断したのかガジェットたちはエリオへと攻撃を集中し始めた。

「はあああぁぁぁ!!!」

さらに加速しながら攻撃を回避し続ける。
だが、それでも完全に避けることはできないので時折被弾してしまう。

「フリード、ブラストフレア!!」

炎の火球はガジェットへ飛んでいく。
当たると同時に辺りを炎で巻き込んだ。
飛んでいる？型は熱に耐えきれず爆発を起こして墜落して行く。

「ラスト！」

「やったー！」

「ギャフ！」

ガジェットを倒し終えた2人とフリード。
なのはの元へ向かおうとするが――

「ＩＳ・・・スローターアームズ」

一瞬にしてフリードが切り裂かれる。
体制を立て直そうとするが追撃するかのように翼に、体にブーメラン状の剣が何本も突き刺さる。
そのせいで立て直せず崩れてしまった。

「フリード！！」

「呆気ないですね・・・」

「お前は！」

「どうしてここに！！」

「知る必要はありません。あなたたちはここで消えるのだから」

キャロへ振り下ろされた一撃。
だがそれは届く事はなかった。
エリオがソニックムーヴを使いすぐさま防いだからだ。

「キャロはやらせない！」

「いいでしょう。相手になってあげます」

ｓｉｄｅｏｕｔ

現在、カリグラにつかまっている状態の桜。
左手の負傷もあり、なかなか抜けずにいた。

「バカ力が！ドラグーンビット！！」

すぐさまカリグラを射撃。
緩んだ一瞬を見逃さず脱出を成功させた。

「ハァ、ハァ、痛・・・」

「無様だな、フォーツー」

「その声は、ナイン・・・！！！」

「私も居るんだけどな～」

「・・・私も」

ついにアンチクロス全員がそろった。
ハンディがある桜に勝ち目はない。
いや、ハンディが無くても勝てないだろう。
いくら桜でも7体1で勝てるほどアンチクロスは甘くない。

「全員集合か・・・」

「諦めて死霊秘法を渡せ。その後じっくりなぶり殺しにしてやるからよ」

「いやだね。みすみす相棒を手渡すヤツは最悪なヤツだ。そうだろ？エセルトレーダ」

「私に気付いていたんですか。流石はアルの相棒ですね」

「今回は自分の意志でそいつについているのか」

「はい。それと6年前の礼をここで言わせて下さい。ありがとう、邪神に操られていた私を開放してくれて」

「気にするな。アルに頼まれたからな。妹を助けてやってくれって」

「そうですか」

「無駄話はそこまでだエセルトレーダ。こいつは殺す」

「わかりました、マスター」

「しんどいな。こりゃ」

ｓｉｄｅｏｕｔ

エリオがセッテと戦闘している同じ頃。
はやて、フェイト、シグナム、ヴィータはガジェットたちを全滅させたのでなのはたちの援護に向かおうとしていたのだが――

「すまないが、もうしばらくここにいてもらうぞ」

「え！？」

「あなたは！？」

声がする方を向くと、そこにはトーレ。
そして大量のガジェットがいつの間にかいた。

「主、気をつけてください！かなりの数です！」

「こんなに数が多いのに何で気がつかなかったんだ？」

シグナムとヴィータはデバイスを構えて臨戦態勢に入る。
フェイトはトーレに問いかけた。

「どうしてあなたがここに」

「お久しぶりですねフェイトお嬢さま。ドクターの指示で今、我々は動いています。今頃、エース・オブ・エースが残りの者と闘って

いることでしょう・・・」

「なんやて！？」

「なのは！？」

トーレの言葉に慌てふためくフェイトとはやて。
急いでなのはがいた建物をみる。
中ではガジェットと戦っているなのはの姿があった。

「はやて！」

「せやな、急いで援護に！」

「行かせるはわけにはいかん！！」

トーレの言葉にガジェットたちが動き出す。

「く！散回して各個に応戦！切り抜けるで！！」

はやての言葉にフェイトたちも動き出す。

シグナム、フェイト、ヴィータが突っ込み、立ちふさがるガジェットを片っ端から叩いて行く。
そこにトーレが突っ込んでくる。

「おおおおぉぉぉぉ！！！！！」

「くっ！！」

「テスタロッサ、そいつを頼む！私達はガジェットを！」

「わかりました！」

一旦距離を取り今度は真正面にトーレを捉えるフェイト。

「どうしてこんなことを・・・」

「先ほども言いましたが、ドクターの指示です・・・それ以上は言えません」

「なら、もう一度あなたを捕まえて教えてもらいます！」

第１２話　？がれた翼　堕ちるエース

「ハァ、ハァ、ハァ・・・」

外での戦闘が激しい中。
建物の中で闘っているなのははピンチに陥っていた。
倒しても倒しても数が減らないガジェットの群れ。
その軍隊に徐々に追い詰められ、今ではバリアジャケットもボロボロ、魔力もほとんど無くなってきていた。

「流石ですね～。結構の？型の装甲って堅い上に、ＡＭＦの出力も一番強いのにこれだけ粘るだなんて」

クアットロはニヤニヤしながらなのはを見る。
傍にはの？型がクアットロを守るように控えていた。

「諦めない、絶対に」

そう言ってなのははレイジングハートを握り締めた。
一瞬でも隙ができたらバインドで縛って一気に決める。
なのはは勝負を一瞬で決めるための算段を頭の中で作った。

「一気に決める！ＲＨ！」

そう言ってディバインバスターを放とうとして砲撃に態勢に入るが
――

「あ～らそうですか～。なら・・・」

クアットロはコンソールを操作する。
するとさっきまでいなかった子供が現れた。

「お姉ちゃん・・・」

「助けて・・・」

「っ！？」

なのはの砲撃の射線上に現れた子供は助けを求める。
一体どうしてだろう。
疑問が頭をよぎる。
そして撃つのをやめてしまった。

「ど、どうして！」

「相変わらず甘いわね・・・」

「え、きゃあああぁぁぁぁぁ！！！」

なのはがレイジングハートを下げたと同時に？型のケーブルがなのはの体を捕まえた。
体の自由を奪われたなのは。
身動きが出来ない状態でさらにケーブルが巻きつく。

「く、ぐうぅぅぅ・・・」

「無駄よ～。ＡＭＦは発生源に近づくほど強力になるのは知ってるでしょ～？」

「ぐ、うううぅ・・・」

「もお、諦め悪いわね～」

クアットロは溜め息をつきながらコンソールを叩く。
すると、？型がなのはを囲むように集まり始めた。

「な・・・何？」

「さあ～。何でしょうね～？」

苦しみながらも小声でいうなのは。
しかし、クアットロはクスクス笑うだけ。

「そ、その子たちを・・・どうするつもり・・・？」

「あ～、そういえば忘れてたわ～」

クアットロは子どもたちの前に立つと、パチンと指を鳴らした。
その瞬間――

「っ！？」

子供はまた音もなく消えてしまった。
なのはは信じられないことが起ったので目を開けて驚く。

「どうして・・・」

「ふふふ、特別に教えてあげる・・・。私のＩＳは覚えてます～？」

「シルバーカーテン・・・」

「正～解～」

「でも、それだったらデバイスが・・・」

「なら、そのデバイスのシステムを掌握したとしたら？」

「なっ！？」

「私たちが何もせずにだらだらと時間を過ごしたと思って？ドクターのおかげで色々と強化されましたの～」

「そんな・・・」

「私のＩＳもそう、処理能力の向上で複数の対象を騙すことができるわ。まあ、他にもありますけど・・・」

「もしかして私のＲＨは・・・」

「察しがいいわね～。ちょこっとだけ、システムを狂わせてもらったの～。うふふ～」

「くっ！？」

「さて、そろそろおしゃべりはお終いにしますわ～」

そう言ってスタスタと窓へとクアットロは寄る。

するとそこに？型が一体やってきた。

クアットロは窓を蹴り割ると?型に飛び乗る。

「もうすぐそこにいる全ての?型が自爆するわ。頑張ってね〜」

「!?」

クアットロの言葉になのははまた目を大きく見開く。
軽く見まわしただけで２０体がいる?型が自分の近くで爆発する。
しかもＡＭＦのせいで上手く魔法が使えない状況。
最悪の状況から何とか脱出しなければとなのは。
だが動こうとするが、?型のケーブルが巻きついているせいで脱出ができそうにない。

「うふふ、頑張って生き延びてみなさい、エース・オブ・エース・・・。あっはははははは!!」

クアットロは高笑いしながら離れて行ったのであった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

エクシードが破られた。
最後の切り札を破られた桜に勝機はない。
ならばもう一つの切り札を使うしかなかった。

「フルドライヴ、どんぐらいもつ?」

『今の状態では頑張っても１０分が限界でしょう』

「薄くしたら？」

『せいぜい１１分といったところでしょうか』

「やれるだけやるか。フルドライヴ！！」

『イグニッション』

「ギア、インフィニット！！！」

『ディスティニーウイングインフィニット』

白銀の翼は粒子になり消え去った。
そして紅と赤紫の翼へと変貌する。

「バリアジャケット、パージ！モードツインソード」

『パージ。ツインソード』

上着の部分だけを消す。
極限まで薄く、極限まで軽くする。
速さをあげて最速で決める。

「行くぜ、ナイン」

「来い、葬り去ってやる」

ガキン！ガキン！

高速で行われる戦闘。
ぶつかり合う剣。
常人には眼に追えないスピードで行われている。
打ちあいの途中で、ＺＥＲＯに罅が入る。
何度も打ちあっているため耐えきれなくなったのだろう。
（ナインも高速戦闘がお得意かよ。勝てるかどうかは、怪しいな）
しばらく打ちあいが続く。
そんな中、桜の眼にあるものが入った。
なのはだ。
ガジェットのケーブルに絡まれ身動きできない状態。
周りにガジェットがいて最悪の状況と言ってもいい状態だった。
「よそ見とは余裕だな！」
「！？」
テリオンの攻撃を紙一重で避けた桜。
そしてそのままアンチクロス全員を無視してなのはの元へ一直線。
ＡＭＦが強いためさらに翼が薄まってしまう。
「母さん！」
「桜！」
「ちょっとまって。今助けるから！」

ガジェット数体を一閃。
ケーブルはばらばらになり縛っていたガジェットは爆発する。
その時だった。
桜は襲ってこないガジェット見て感じ取った。
こいつらは自爆する気だと
「ＺＥＲＯ！母さんにプロテクション張れ！早く！！」
『イエス』
一瞬だった。
ガジェットが大爆発。
桜は無意識になのはを抱きしめて護っていた。
そして『翼の英雄』は命を落としたのであった。

第12話　?がれた翼　堕ちるエース（後書き）

ついに桜が死亡！！

あと数話で死神登場！！

どうなるかは不明です。

第13話　祈り

外では未だに戦闘が続いていた。
トーレとフェイトが高速戦闘を行っており、ティアナ達が邪魔なガジェットを倒して行く。

「くっ！」

「フェイトちゃん！」

フェイトたちの周りにはやてたちがやってきた。
空を飛べないチンクたちはその下の地面に立っている。
どうたらトーレが引き連れていたガジェットたちを倒したようだ。
だが、全員のバリアジャケットがボロボロなことから激しい戦闘をしてきたことが容易に分かる。

「はやて！」

「ギン姉！みんな！！」

「よお持ちこたえたな！ここから反撃やで！！」

そう言ってはやてたちもそれぞれのデバイスを構えた。
するとそこにセッテが現れる。

だが、セッテの姿を見てウーノとトーレは驚いてしまう。
なぜならセッテがボロボロだったのだからだ。

「何があった？まさか苦戦したのか？」

「はい、申し訳ありません・・・」
そう言って頭を下げるセッテ。
何があったのかと困惑するはやて達だったが・・・。
「エリオ！？」
「おい！しっかりしろ！」
今度はギンガとノーヴェの声がフェイトたちの耳に届く。
一体何事かと思って声のする方を見ると――
「エ、エリオ！？」
ボロボロの姿のエリオとキャロが立っていた。
バリアジャケットはもう機能してないのではというぐらいボロボロだ。
ストラーダも罅や傷が目立っている。
今はディエチに支えられてやっと立っている状態だ。
「エリオ！大丈夫！？しっかりして！！」
フェイトは直ぐにエリオの元に向かう。
エリオはフェイトの姿を見ると力なく笑った。
「ごめんなさい・・・。足止め・・・できませんでした・・・」
「喋っちゃダメ！キャロは？キャロは大丈夫！？」

「はい、あの・・・私は・・・」

キャロは力を解除したフリードを抱きしめながら小声で何かを言おうとする。

そんなキャロを見かねたエリオが代わりに言った。

「キャロは大丈夫です・・・。僕が・・・守りましたから・・・」

「まさか、セッテと闘って・・・」

ディエチの問いにエリオは頷いた。

「たった1人で、どうしてそんな無茶を・・・」

「ごめん・・・なさい・・・フェイトさん・・・。私のせいなんです・・・私が・・・」

「キャロ・・・」

謝りながら泣くキャロ。

何かあったんだろうとフェイトは悟り、これ以上は後で聞こうと決めた。

「後は私たちに任せて休んでて・・・」

「すみま・・・せん・・・」

フェイトの言葉にエリオは直ぐに目を閉じた。

限界ギリギリだったのだろう。

「キャロはエリオを連れて離れて。いい？」

「はい・・・。あの・・・」

「何？」

「フェイトさんも・・・無理はしないでください・・・」

「うん・・・ありがとう。ディエチ、悪いけど2人をお願いしていいかな？」

「はい」

そう言って三人はここから離れるのであった。

「フェイトさん・・・」

「大丈夫・・・。今は目の前のことに集中する。ね？」

「・・・わかりました！」

ギンガは心配して声をかけるが、フェイトの言葉を聞き再び気を引き締めた。

そして再びトーレを正面にとる。

「何があるかわからないから地上も注意してね！」

「はい！」

空中へ戻った時だった。

?型に乗ったクアットロがやってきたのだ。

「は～い、ちゅうも～く！」

「クアットロ！」

トーレは?型に乗ってやってきたクアットロに声をかける。
クアットロはコンソールを操作する。すると、周りに再び数体のガジェットが出現する。
はやてたちは警戒するがガジェットたちは動かないでいた。
そんな中・・・。

「みなさ～ん、これから面白いものが見れますよ～」

クアットロは3人よりも前に出て楽しそうに言い、はやてたちを見る。
その顔は少し笑っていた。

「どういうことだ?」

「わからないわ。ともかくみんな固まって！」

ノーヴェが一人疑問を持つが、ギンガは固まって対処をしようとみんなを呼び掛ける。
ギンガの言葉に地上にいたチンク、ノーヴェ、スバル、ティアナがギンガの近くに寄る。
空ではははやての傍にフェイト、ヴィータ、シグナム、ウェンディが集まった。

「うふふ。さあ、この建物に注目して～。１０秒前～」

クアットロの言葉に全員が後ろにある建物を見る。
そしてカウントが始まった。

「3、2、1・・・」

そしてゼロになった瞬間・・・。

ドカアアアアアアアアァァァァァァァァァァン！！！！！

建物の真ん中で大爆発が起こった。
それは全ての窓を割り、その窓からモクモクと黒煙が辺りに立ちこめ、空へと昇って行く。
凄まじい爆発だったにもかかわらず建物は倒壊しなかった。
それだけが不思議である。

「びっくりした～」

「何のためにあんなことを？」

スバルとチンクは警戒を解かないまま考える。
そんな中、黒煙の中から黒色と白色の何かが出てきた。
それは重力によって地面に落ちて行く。
そして、それがドサッと音と共に地面に横たわった。

「・・・え？」

「・・・あれって・・・」

「嘘・・・でしょ・・・」

それに気がついたフェイト、ヴィータ、はやては体を震わせる。
それが何か分かってしまったからだ。

「アッハハハハハハ！！どうかしら～？」

クアットロは3人の反応を見て楽しそうに高笑いする。

「嘘でしょ・・・お願い・・・動いてよ・・・」

フェイトは涙をためながら叫んだ。

「桜ーーー！！！！なのはーーー！！！！」

そう、爆発によって放り出されたのはなのはと桜。
上着のない桜の黒いバリアジャケットは背中の部分が焼けており、
背中自体も焼けていた。
その上体中から血を流しており生きているわからない状態。
なのはの白いバリアジャケットはボロボロになり、同じように体か
らは血が流れていた。
そして2人ともピクリとも動いていない。
それを認識し始めたギンガたちも目を大きく見開いて驚愕の表情を
する。

「さぁ、これで2人のエース・オブ・エースは――」

クアットロは「死んだ」と言いたかった。
だが・・・。

「・・・う・・・く・・・！」

「っ！？なのはさん！？」

本当にか細い小さな声だったが、スバルの耳には聞こえた。
なのはの小さな息遣いが。

「なのはさん！！」

スバルはマッハキャリバーを吹かし走り出す。
だが眼の前にガジェットが現れ行く手を阻む。

「あら？ま～だ生きてるの？」

『ええ。とても小さいけどちゃんと生命活動をしているわ』

クアットロの言葉にウーノが返す。
そしてガジェットがなのは達の元へ動き出す。

「それじゃ、ちゃんとやらないとね・・・」

今度こそ完璧に殺すためガジェット達が迫る。

「させっかよ！」

「みんな行くで！」

はやての言葉に全員動き出す。
しかしトーレとセッテも邪魔をし行く手を阻んだ。

「させるか！」

「通しませんよ！」

戦いはまだ続くのであった。

ｓｉｄｅｏｕｔ

ヴィヴィオ達はアイナさんから御使いの途中でショッピングモールへとやってきていた。
だが突然スカリエッティが映像に映り４人は混乱していた。

急いで避難していると管理局の魔導師がやってきた。
聞こえていた話によるとガジェットを街に放したからだそうだ。

そのまま地下にあるメインストリートのところに集まって闘いが終わるまでここにいるようにと言われ避難していたヴィヴィオ達。
ヴィヴィオ達は魔導師に人にどんな事が起こっているのかを聞いてみることにした。

「あの、すみません・・・」

「何だいお嬢ちゃん達？」

「今外がどうなっているかわかりませんか？」

「えっと、それは・・・」

ヴィヴィオの言葉に言いにくそうな顔になる局員。

「私のお母さんとお兄ちゃんが管理局にいるんです・・・」

「そうなんだ・・・。名前言ってごらん。わかることなら教えるよ・・・。周りには言わないでね？」

局員は小声でそう言った。
ヴィヴィオの家族が心配ということで特別に教えてくれるようだ。

「あの、なのは・スクライアと高町　桜です」

「あのスクライア一等と高町一尉の！？」

物凄く驚いた局員。
無理もないだろう。
２人のエース・オブ・エースはあまりにも有名すぎるからだ。

「地上本部の方で警備についているぐらいし知らないな・・・。その後は各部隊長の指示に従って動いていると思うが」

「そうですか、ありがとうございます・・・」

そう言ってお礼を言った後離れる。
そして４人で静かに待っていた。

みんなが無事で帰って来てくれることを・・・。

第１４話　通りすがりの死神

（ここは何処だ・・・）

気が付いたらそこは真っ白な場所だった。
何もない、本当に真っ白な場所。
それだけしか言えないような場所だった。

「やっと来たわね。待ちくたびれちゃったじゃない」

（へ？）

今度は・・・ティアナさん？
いや、ティアナさんはオッドアイじゃないし、第一こんな場所に居るわけないじゃないか。

「うん、そうね。私はティアナじゃないわよ」

（心読まれた！？）

「その状態で喋るのなんかめんどくさそうね。体をあげないと」

そう言って女性（仮）は指をちょいっと動かす。
別に何か変化もないけど。

「喋ってみて」

「あ～、あ～。あれ？声出せる」

「よし、魂の固定完了ね」

「な、何の事？」

「自己紹介がまだだったわね。私の名前はアテナよ」

「人の話無視！？ってあれ？」

今更気がついた。
声がかわっている。
なんというか中性的な声って感じだ。

「うんうん、調子は良好みたいね。ちなみに全部変わってるから」

「全部？」

「はい、鏡」

そう言って眼の前に突然現れた鏡。
そこに映っていたのは見覚えのない少女。
炎髪灼眼で漆黒の服を身にまとっている。

「・・・えええええぇぇぇぇ！！！！！？？」

そう、そこに映っていたのは自分だった。
前の面影なんて微塵も残っていない。

「な、何これ！お、お、俺！？」

「そ、新しい体だから面影残さないのは当たり前だから。あ、つい

でにこれなんてどうだろう？」
また指をちょいちょいと動かしたアテナ。
今度はどうなったのかと思うと――
「自分の事をなんて呼ぶ？」
「え？僕。あれ？」
何故か一人称が代わっていた。
もうリアクションするの疲れてきた・・・。
「疲れるの早いわね」
「別にいいでしょ」
「そうね。それとあなたに会わせたい人がいるのよ」
「僕に？」
「そ。出てきていいわよ」
彼女がどこかに声をかける。
そして出てきたのは自分よりちょっと背の高いぐらいって言うぐらいの女の子。
「ア、アル・・・？」
「お、おう。ひしぶ――「アル！」――おわっ！ちょ、いきなり！」

すぐさま抱きついてしまった。
嬉しかったから。
相棒とまた会えるなんて夢に思わなかった。

「アル・・・！アル・・・！！」

「・・・ごめんな、心配かけて」

「あの～、感動の再会を邪魔して悪いんだけど本題に入っていいかしら？」

「あ、ごめん」

～説明中～

「ということなのわかった？ちなみに言っておくけど拒否権なんてないから」

「はぁ、それで僕が死神になると」

「頑張って連れ戻してきてね」

「了解です」

この後チート的な能力＋αを貰い現世へ。
だけどその前に。

「あ、死霊秘法のページ更新するの忘れてた」

「ページ更新？」

「うん。デモンベインとか壊れたのたくさんあるでしょ？それとかを新しくしちゃうの」

「ふ～ん。どんぐらいかかる？」

「３０分ぐらい？」

「じゃ、ちゃっちゃとやって行こうよ」

「うん。アテナ」

「はいは～い。任せなさい。神様に不可能はたぶんないんだから」

ページ更新開始。
使用武器設定が始まった。

「使用武器は？」

「クトゥグアとイタクァは絶対で、あとはお任せで」

「わかった。使用武器、クトゥグア、イタクァ、万死ヲ刻ム影、大剣シラード、刺し穿つ死刺の槍、炎剣レーヴァテイン、氷剣アイスベルグ、以上を使用武器とする」

「鬼械神は？」

「デモンベイン【運命（ディスティニー）】」

「設定完了。ちなみに現世にあるやつだから早く取りに行かないと

トゥエルブにとられちゃうから気をつけてね」

「マジ！？早くいかなきゃ！、そうだ」

思い出したかのように思いついたこと。
それをなんとなく言ってみると・・・。

「簡単よ。それだけならね」

「ホント！？それじゃ、クトゥグアとイタクァだけすぐに出してもらえる？」

「はい」

ホント、何処からか出したかわからないけど銃を二つ手渡される。
一つは自動式拳銃。
もう一つは回転式拳銃だ。

「よし。じゃ、行ってきます」

「ん、行ってらっしゃい」

そう言って足元が無くなった。
そして重力のまま真っ逆さまに落ちてゆく。

「アテナーーー！！！！」

「ごめん、間違えちゃった☆」

ｓｉｄｅｏｕｔ

クアットロはなのはへ銃を向けた。
完璧にとどめを刺すつもりで。

そんな中ガイストも桜の元へ近づいていた。
今なら簡単に死霊秘法を簡単に奪えるチャンスなのだ。

「おい、どけ」

「いや・・・だ」

意識を取り戻したなのは。
だが体が動かない。
痛みの走る腕で必死に桜の体を引き寄せている。

「てめぇ、死に損ないの分際で」

「だめええぇぇぇ！！」

突然聞こえた声。
そしてなのはと桜の前に立った女性。

「ヴィ、ヴィオ・・・。なん・・・で・・・」

そう、立っていたのはヴィヴィオ。
避難していた場所からこっちまで来たのだろう。

「お久しぶりですね～陛下」

「な、なんであなたたちが！！」

「ドクターのお手伝いですよ～。それ以外に理由はな～んもありません～ん」

『クアットロ、ちょうどいいから新型のテストでもしてみたらどうだい？』

突然また現れたスカリエッティ。
それに少し笑いながら答えるクアットロ。

「いいですね～」

『頼むよ。出来るだけデータがほしい』

「は～い、お任せくださ～い！」

そう言ってコンソロールを叩き始めたクアットロ。
眼の前に出てきたのは人型のガジェット。
全員なんだろうと身構えている。

「なんなんだあれ？」

「見たことがないッスね・・・」

『これは新型なのだよ。知らなくて当然だ』

「は～い、初期設定を終えました。起動しますよ～」

クアットロがそう言うと、隣に立っていた人型が首を上げて目の代わりになっている赤いレンズを光らせた。

「これはガジェット?型の試作機さ。ガジェットと戦闘機人の合作と言えばわかりやすいだろう?」

「何だと!?」

「そんなものが・・・」

スカリエッティの言葉に驚くフェイトとシグナム。

『では、テストを始めてくれ』

「了解ですわ〜」

『では、私がガジェットの制御を。トーレとセッテは邪魔者を入れないように』

「わかった」

「了解です」

ウーノの言葉にトーレとセッテは頷く。
ウーノはそのままコンソールを叩いて増援できたガジェット全部をはやてたちの方へ向かわせる。

「これでしばらく邪魔は入らないわ」

「ありがとうございます、ウーノ姉さま。それじゃ、始めましょう

か～」

クアットロの言葉にガジェットの?型は一歩前に出る。
そしてヴィヴィオの方を見る。
それを見てヴィヴィオは構えた。

「ヴィヴィオ!ダメだよ!!」

「もう少し待ってて!そっちに行くから!」

スバルとティアナはヴィヴィオに叫ぶ。
だがヴィヴィオは引こうとしない。

「私だって闘える。だから、大丈夫」

ヴィヴィオは闘う意思をはっきりさせていた。
その言葉にスバルたちは驚く。

「何言ってるのヴィヴィオ!やめ――」

「私だってみんなを守りたい!!」

フェイトが言い終わる前にヴィヴィオは叫んだ。
そしてさらに続ける。

「守られてるばかりじゃもう嫌だ・・・。それに約束したもん。強くなるって・・・。みんなを守るようになりたいって・・・」

「ヴィ・・・ヴィオ・・・」

「だから闘う！大切な人を・・・守るために！！お兄ちゃんだってなのはママを命がけで助けた！だから！」

そう言って足元に魔法陣を出現させた。
そして拳を強く握る。

「さぁ、行きなさい！！」

その言葉に？型は空を蹴ってヴィヴィオへと向かう。

「はあああぁぁぁぁ！！！」

ヴィヴィオはその場で拳を突き出した。
それに合わせるように？型も拳を打ち込む。
そして互いの拳が当たり、ヴィヴィオの闘いが始まった。

ヴィヴィオは接近してきた？型に流れるように蹴りと拳を繰り出す。
だが？型はわかっていたかのように全てガードする。

「くっ！」

気合いを入れての右ストレートを出す。
それを？型は首を捻って避け、両手でその腕を掴むと背負い投げのように地面へとヴィヴィオを叩きつけた。

「がはっ！！」

叩きつけられ肺の中の空気を吐き出す。
威力は相当だろう。
地面がめり込むほどなのだから。

ヴィヴィオが戦っている中桜の持っている死霊秘法は光を放っていた。
それを見ていたガイスト。
「さて、さっさと回収して退却するか」
死霊秘法へ手を伸ばした時だった。
バン！
指先に紅い弾丸のようなものが撃ち込まれる。
「な！？」
バン！バン！
今度は水色。
そして・・・。
ガガガガガガガガガガ！！！！！
その場にいる全員に紅と水色の弾丸が大量に撃ち込まれる。
まるでマシンガンのように撃たれる銃弾。
雨のように降り注ぐ弾丸にガイストはその場を離れ、他は防御に移る。
そして弾丸の雨がやむ。
そしてなのはの眼の前に1人の子供が舞い降りた。

「誰だてめぇ！」

ガイストは叫ぶ。

邪魔をされ、苛立っているのだろう。

「僕？僕は――」

その少年のような少女は漆黒の服を翻し。

炎のように紅い髪をなびかせ。

灼熱のような眼でガイストを見て、ちょっと笑いながらこう言った。

「通りすがりの死神だよ！！」

第１４話　通りすがりの死神（後書き）

ついに登場！

死神の力は次回明らかに！

ちなみに名前が「死神」じゃ呼びにくいので「ロゼオ」という名前にしました。

「桜」をもじっただけですけどね・・・。

第15話　Supernova

「通りすがりの死神だよ！！」

少女はそう高らかに言い切った。

誰が聞いても「死神」と言ったのだ。

「死神だぁ？」

「そ、死神」

その顔を見たテリオンは悟った。

こいつは危険だと。

「ガイスト！そいつを殺せ！後の障害になる！」

「ん？そうか、お前、俺らを捕まえに来たのか」

「そう、その通り！察しがいいね。でも、”ザコ”ごときに僕を殺せるかな？」

「ガキだからって調子乗ってんじゃねえ！！！」

そう言いながら剣を突き付けるガイスト。

そして瞬く間に少女の心臓を一突きした。

「・・・ぁ・・・！！」

その場に倒れて血を流す少女。
この時全員が完璧に死んだと思っていた。
だが――

「あ～、いったいな～。一回死んじゃったじゃん」

『！？』

死神に死はない。
全員が驚愕する。
死んだ人間が生きかえるなんてありえなのだから。

「どう？これでわかったでしょ？ザコごときに僕は殺せないって」

「な、なんだよ・・・お前・・・」

「だから言ったでしょ。通りすがりの”死神”だって」

アンチクロス、ナンバーズ、六課全員ともに固まっていた。
いきなりこんなのが現れて死んだと思えば死んでいない。
動く事が出来なかったのだ。

誰も動かない中少女はなのはの元へ向かった。

「大丈夫？」

「い、一応は・・・」

「そ。じゃ、これ、ちょっと借りていい？」

そう言って桜の死体から死霊秘法を取り見せる。

「いい？」

「そ、それは・・・桜の・・・。ちゃんと、返すんだよ・・・？」

「ありがと。・・・さて、処刑の時間だ」

ここから「仮面ライダーキバ」の挿入歌

「Ｓｕｐｅｒｎｏｖａ」を流すと雰囲気が出ると思いますｂｙ駄作者

「せ、せめてあいつだけでも！」

クアットロは持っていた銃をなのはへむける。

だがそんなのをみすみす見逃すはずがない。

「やらせない！」

すぐさまクアットロが乗っていた？型を撃ち貫く。

飛行できなくなり地上へ降りたクアットロにも少女のプレッシャーがかかる。

「ひっ！」

「あれ、使っていい？」

突然１人で喋りだした少女。

そして何処からか仮面を出し顔にとりつける。

左手をまくり、見せるように構えた。

その手には紋章。
異様な形のそれはまがまがしいという言葉がぴったりだ。
少女は爪を立てその紋章に傷を入れた。
「加減効かなくなるから、歯ぁくいしばってね」
少女の雰囲気が一気に変わる。
まるで獣のような姿だ。
「――――――――――――――――――――！！！！！！！！！！」
その叫びは大地を震わす。
完璧な獣へと変貌を果たした少女はセッテへ向かう。
そしてたった一撃。
たった一度の攻撃でセッテを気絶させた。
その後一気にガジェットの群れへと入る。
中心部へ行きその後何の音もしなくなった。
少しの間の静寂が続く。
だがそれも一瞬。
ガジェットが中心から爆発して行く。
そして中心には仮面を外した少女。
「ちっ、あいつらには逃げられちゃったか」
さっきの騒動の間、アンチクロスはその場から逃げだしていた。
完璧に勝てない。
そう判断し、逃げたのだ。

「おおおおぉぉぉぉ！！！」
初めて攻撃を仕掛けてきたのはトーレだった。
それを銃で受け止め笑う少女。
「ぷっ、あはははは！」
「何がおかしい！」
「あはははは、何がおかしいともう？」
トーレの横腹に蹴りを思いっきり入れた。
地面へ突き落され肺から全ての空気を吐き出すトーレ。
「命乞いでもしてみる？ま、問答無用で殺すけどさ」
「ここは、いったん・・・引かせてもらおう・・・。クアットロ・・・」
「は、はい」
そう言ってナンバーズは消えていった。
「ちぇ、つまんないの～」
そう言って六課メンバーの所へ向かう少女。
途中で融合機らしい者が出てきた。
どうやらユニゾンしていたらしい。

「初めましてに――」
六課メンバーに挨拶しようとした時だった。
急に倒れこんだ少女。
「マスター！？どうしたのマスター！？」
「ハァ、ハァ・・・」
顔が少し赤かった。
フェイトが近寄りでこを触る。
「すごい熱！早く六課に！」
「う、うん！だれか、なのはちゃんと桜を運んだげて！」

ｓｉｄｅｏｕｔ

場所は地上本部から変わって機動六課。
現在なのは、桜、そして死神を名乗る少女のを搬送していた。
なのはは現在治療中。
桜は・・・。
「フェイトちゃん、言いにくいんだけど・・・」
「桜は・・・」

「桜君はもう・・・」

「そんな！」

「なのはちゃんは桜君がかばったからなんとかなったけど。桜君自身はプロテクションすらない状態で爆発をじかに受けたの。だから・・・」

シャマルの言葉にフェイトは言葉を発せなかった。
大切な人を亡くした悲しみはこれで2度目だ。
最初は母、プレシアを失い、次に最愛の人、桜を失った。

「最善は尽くしたけど、本当になんてお詫びしたら・・・」

「シャマルが謝る必要ないよ・・・。頑張って桜を直そうとしてくれたんだから・・・。そう言えばあの子は・・・」

必死に涙をこらえながらたずねたフェイト。
それに優しく答えるシャマル。

「あの子は今も寝ているわ。一緒にいた子は未だに何も話してくれないけど」

「よかった。でも、何者なんだろう。死神って言ってたけど」

「本人が起きたら直接聞けばいいのよ。今は休んで」

「ありがとうございます。ちょっと様子見たら、休ませてもらいます」

医務室のベッドの上。
そこに少女は眠っていた。

「使えないはずの桜の魔導書を使って戦って、アルに瓜二つのユニゾンデバイスを連れている。一体にな物なんだろうなそれにしても・・・」

その寝顔を見ているフェイト。
近くに座って頭をなでる。

「妙に保護欲わいちゃうな～。こんな時なのに」

そして自分の部屋へ戻って休むフェイトだった。

第15話　Supernova（後書き）

次回。
どうなるかはまだ未定！
挿入歌は聞いていたらなんかいれていな～って思ったから入れました。
後悔はない！
ちなみに挿入歌は「そう言ってナンバーズは消えていった」の所で終わりです。

第16話　ロゼオ

戦いがあった翌日。
はやてとティアナは未だに眠っている少女の所へ来ていた。

「で、君達が何者か聞きたいんやけど」

「だから言ってるでしょ。マスターの許しがなきゃ私は話せないって」

「でもいつまたあいつらが襲ってくるかわからないの。だからはやめに――「うっ・・・」――あ、起きた見たいね」

はやてとアルの会話の中少女は起きた。
頭を押さえてきょろきょろしている。

「こ、ここは・・・」

「ここは――「機動六課」――え!?」

「アル、何か話した・・・?」

「なんにも。怒られたら嫌だから言ってないよ」

「そ。早くいかなきゃ・・・」

アルの頭を撫でた後ベッドを出ようとする少女。
だがそれをティアナが止める。

「ちょっと待って。あなたたちが何者なのか教えてくれない？」
「だから言ったじゃないですか。死神だって」
「何のために来たとかそう言うのとかも教えてほしいんだけど」
「いやです。何で教える必要があるんですか？」
「一応事情聴取ってヤツよ。だから教えてくれる？」
そう言われた少女はまたきょろきょろとする。
そして折れたのかこう言った。
「誰にも言わないでくださいね。もし誰かに言ったら――」
「言ったら？」
「殺して魂を地獄に送りますから」
2人は黙ってうなずくことしかできなかった。
この少女が自分たちを狙いに定めてくると言う事は、すなわち死を意味する。
死んでも死なないこの子は一体何者なのだろうと思いながら聞き始めた。
「ちなみに言っておきますが録音とかしても殺しますよ。なので予め切っておいてくださいね」
「わ、わかった」

「僕は名のない死神です。世に言う神様の使いでこの世界に居る死者を連れ戻すことが僕の使命なんですよ」

「死者？」

「ん～、死んだ人って言えばわかりやすいですね。その魂があの世から脱獄しちゃうんです。で、その脱獄に頭を悩ませた神様が僕の魂を使って死神を作ったんですよ。いちいち誰かが行って連れ戻すのがめんどいからって言う理由だけで」

「ということは君も死者って事？」

「はい、死んでますよ一回。ちなみに僕の体は火葬とかされてません。まだ残ってます」

「じゃ、探して――「死にます？」――やめとくわ」

「まぁ、なんにせよ僕はあのアンチクロスとかいう連中を殺して魂を連れ帰んなきゃけないんです。これでいいですか？」

「レアスキルとか持ってるの？あの雰囲気変わったときみたいなのとか」

「ん～、あれはまぁ、言っていいかな。あれは僕のレアスキルの”一つ”です」

「一つ？」

「はい、僕はいくつか持ってます。その内の一つで『狂化（バーサーカー）』この紋章を傷つけることで発動です。まぁ、読んで字のごとく身体強化で

すよ。ただ強化の度合いが違うだけで」
腕の紋章を見せて言う。
こんな強力なものをあといくつ持ってるのだろうか。
「他には『騎士(ナイト)は徒手(オブ)にて死(オーナー)せず』かな」
「『騎士(ナイト)は徒手(オブ)にて死(オーナー)せず』？」
「能力は誤認使用。どんなデバイスも僕は使うことが出来ます。元の持ち主より確実にうまく使いこなしてね」
「じゃぁ、桜の魔導書を使えたのは・・・」
「あ、あれはもともと僕のものだから」
「へ？」
ちょっと意味がわからない一言。
桜が持ち主の物を自分がもともとの持ち主と言った。
どういう意味課は2人はわからなかった。
「ページ更新とかしてあるからもうあの人のものじゃないよ。だからあれは僕のもの」
「でもあれは桜のだし・・・」
「それにもう許可は取ってあるし。本人から」
「へ？」

「あ、言っておくけどあの人はあの戦いの中ですでに死んでいるから。魂に直接聞いたんだ」

無論嘘だ。

桜の魂である死神。

こうでも言わないと死霊秘法を渡してくれないだろう。

「いろいろともいらのもあるし、あの人死体ある場所に連れて行ってくれないかな？」

「・・・」

「い、行ってみよか」

行ってみれば何かあるかもしれない。

そう思った2人は少女を連れていくことにした。

「やっぱ酷い状態だね」

「爆発を直で受けたから」

「こんなんで死ぬなんて情けないな、僕は・・・」

「何か言った？」

「いいえ、何も。さ、いろいろ身につけてるものを拝借っと」

そう言って死体についているものをはぎ取っていく。

と言っても二つしかないが。

「指輪とネックレス？」

「うん。頼まれたんだ、大切な人を守ってくれって」

「大切な人って・・・」

「フェイトちゃんとなのはちゃんやろうな」

「母親と恋人らしいから。魔導書は奪われたら相棒に申し訳が立たないって」

どこか悲しげな顔をする少女。
2人はその顔が何処か見たことのあるような顔だった。

「さ、僕はそろそろ行かなきゃ。手当てしてくれた事には感謝してますから」

「ま、待って！」

「・・・。・・・・！！」

後ろからかけられた声。
振り返るとそこにはフェイトがいた。

「フェイトちゃん・・・」

「・・・盗み聞きですか？」

「そ、それは謝るよ。でも・・・」

「もしかしてこれ？返してほしいなら返すよ」
「返さなくていいよ。それは君が桜に頼まれたものだから」
「ならどいてください」
「どかない」
その場をどかないフェイト。
一歩たりとも動きはない。
「だったら力ずくでも――「絶対にどかない！」――どうして！」
「だって、だって1人で行くんでしょ。危険だよ」
「危険じゃない。僕だから」
「ダメだよ。君だからって理由は理由になってない。それにいくら死なないからって・・・」
少女へ歩み寄り抱きしめたフェイト。
優しく、力強く抱きしめた。
「死ぬのは絶対に怖いはずだよ。それに桜に頼まれたんだったらちゃんと守ってよ。ここで、ちゃんと」
涙を流しながらその言葉を告げる。
その言葉に少女も一筋の涙を流した。

「だからここに居て・・・・」

「僕は、ずっと1人だった・・・・。誰かに抱き締められるなんて久しぶりだよ・・・・」

この後フェイトにも自分の事を話した。
そして機動六課に居座る事に。

「そうだ、僕、まだ自己紹介してなかったね。名前がないけど考えればいいし。ん～、名前は・・・・ロゼオでいいよ」

「ロゼオ・・・・。桜(さくら)ってこと？」

「うん、僕、桜の花が大好きなんだ」

「ふふ、なんだか小さい頃の桜みたい」

「それじゃ、よろしく」

「うん、よろしく」

第１６話　ロゼオ（後書き）

次回もどうなるかはまだ未定ｗ

学校がまだまだ先なのでニート生活まっしぐらの楚良でした（笑）

連載打ち切りのお知らせ

どうも皆さん、作者の楚良（ソラ）です。

このたびはこの「死神の花」を読んでいただいて誠にありがとうございます。

え～、今回はタイトル通り連載を打ち切りにしたいと思います。

理由は、この先の展開をどおすればいいか、ああしたらなんか変になるんじゃないか、こうしたら矛盾が発生するんじゃないか、といろいろ問題が発生しました。

友達と考えながら作っていたんですがもう限界まで来てしまいました。

なので誠にご勝手ながら連載を打ち切りにさせてもらう事に致します。

これまでご愛読されていた皆様、続きを楽しみにされていた皆様、本当に申し訳ございません。

他の小説はこうならないように努力いたしますのでなにとぞ応援よろしくお願いします。

それでは今回はこの辺りで失礼させてらいます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8031r/

魔法少女リリカルなのは　死神の花

2011年10月8日10時40分発行